過去のない男

sky21989

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドールズフロントライン二次創作。４０４小隊の指揮官の生涯を描いています。

あらすじ

物語はＳ０７地区から始まる。７年前、コード２１１７の番号で呼ばれ続けた名も無き青年は自律人形襲撃事件に巻き込まれ、最愛の人を失う。生きる価値、そして将来の希望を失い見知らぬ路上で倒れ込んだ彼は正体不明の軍事会社司令官Ｇに拾われる。やがて彼は〝Ｖ〟と名付けられ、混沌とした世界への「復讐」を志し、兵士として戦場へ赴く。

目次

過去のない男【前編】 1
過去のない男【中編】 32

過去のない男【前編】

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

戦争なき平和というのは、究極の理想、あるいは訪れることのない桃源郷なのだろうか。歳はまだ三十代に至らず、華奢で真面目な雰囲気を醸し出した男が、彼の働いている軍事会社の海上要塞屋上の椅子に腰をかけている。男は、世間では〝Ｖ〟と呼ばれている。彼の目は、眼鏡を通して濁り一つもない青い海に向けている。彼は、戦場に７年身を置いた。しかし、争いは一向に終わらない。三度目の大戦が終了したというのに、人類は何も学んでいない。彼は、戦争に、あるいは世界に飽きれていた。

世界が混沌に陥ったのは、Ｖが生まれる前だった。北蘭島と呼ばれる孤島には、人類の科学技術に進化をもたらすといわれている物質が埋蔵されている遺跡がかつて存在していた。物質は、「コーラップス」そして「逆コーラップス」と呼ばれる二種類のものがあった。これらの物質は人間に有害で、接触してしまうと広域性低放射感染症（ＥＬＩＤ）を引き起こし、やがて死に至るといわれている。ある時、北蘭島の都市開発の掘削が原因で、物質が地上に流出する。これにより、瞬く間にＥＬＩＤの感染者が続出した。事件は特殊警察の介入により、無事解決され、物質流出区域は立入禁止区域に指定される。流出事件について、政府は黙認。故にＥＬＩＤは世界に知れ渡ることはなかった。？　今から３２年前、第一次北蘭島事件と呼ばれる事件が発生される。子供複数人がいたずらで立入禁止区域に侵入し、ＥＬＩＤ感染者の残党に攻撃される。政府は直ちに救出部隊を派遣。部隊は、子供救出と都市開発によってできてしまった遺跡の空洞を塞ぐ目的で、爆破を試みたが、失敗に陥った。子供複数人と救出部隊は全員命を落とし、爆破によって遺跡の空洞はむしろ拡大してしまい、世界に物質の粒子は拡散してゆき、世界は破滅へと向かっていった。？

各地の都市は、見る間に壊滅。物質粒子による放射線の影響により人口は激減した。２０４５年、誰もが望まぬ清浄な土地と食料を、人類の最も純粋かつ野蛮な欲望のままに奪い合う争い、第三次世界大

戦が勃発した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１

　これから不運な出来事に遭遇し続けるであろうとこちら側に悟っているかのような曇天の空。崩壊したビルの破片の上で、４０４小隊指揮官Ｖは、仰向けになりながら眺めている。しばらく、彼がぼんやりと空を眺めているうちに、頭上で誰かが立った。ライトシアンの髪、黒と群青色の戦闘服、そして腰には三つの予備のマガジンを備えた「人形」がこちらを見つめている。

「何しているんです、指揮官。そろそろ任務の時間ですよ」？　　戦術人形ＨＫ４１６。４０４小隊のメンバーの一人である。彼女は常に完璧を求め、戦い続ける。それは以前彼女が別の部隊に所属していた頃、部隊の同志だった戦術人形Ｍ１６とのトラブルがあったためといわれている。

「ほら、行きますよ。仲間も待ってますので」

「悪い。ぼんやりとしていた」？

「また、過去のことを考えていたのですか」

「・・・あぁ」

　７年前。彼らのいるＳ０７地区も現在と比べて豊かな都市だった。３２年前の惨劇から月日が経ち、放射線撤廃作業や地域活性化プロジェクトにより、人々が安全に住めるような地域へと変わりつつあった。生まれながらにして両親の顔も知らず、孤児として生まれたＶは、Ｓ０７地区隔離施設で育った。彼には、名前がなく、コード２１１７の番号が付けられていた。やがて、１８歳となった彼はＳ０７地区の有名大学へ進学し、その学生寮で一人暮らしを始めることになった。彼は、施設内の保護者からもらった近代絵画の写真やその詳細が記載されたアートブックがきっかけで、アーティストを目指す夢を抱き、大学では芸術専攻を選んだ。学生時代の彼は、現在と比べて穏健な性格の持ち主だった。

スポーツ講義の中で、学生のVは二人の親友を得た。隔離施設の中で孤独だった彼にとって、その出会いがとても幸福に感じた瞬間だった。講義内容は、あの忌わしい事件が起きる前、人類が楽しんでいたといわれる「サッカー」と呼ばれる球技だった。Vは、この講義の時間になると、大学の東棟の日陰に佇んで、プレイの上手い同級生を眺めながら、サボっていた。

「なぜ両手が使えないんだろう。使っちゃえばいいのに」

「そこがこの球技の面白いところなのさ」

目の前に、親友のアレックスがやって来る。彼は自身の水筒を右手に抱え、蓋を開き、豪快に水を飲み始める。その後、彼は、Vに「サッカー」の面白さを語り始めた。Vは、競技に全く興味がなかったため、彼の話はそれとなく適当に聞いていた。

「おい、アレックス。そんなヤツほっといて、早く参戦しろよ」

遠くから、この後、親友となるダニエルがアレックスを呼ぶ。

「それじゃ。また後で」

Vは、互いに興味のあるものは異なるものの、どうしてか意気投合する彼らと学生生活を日々楽しく過ごした。この時、どんな些細な事からでも人と人は信頼関係を築けるということを知った。

一方、彼はこの頃、誰かを愛することを覚えた。Vと同様に芸術専攻であるソフィーは、成績優秀、そして容姿端麗の学生で知られていた。第二回のデッサン講義で、彼女の席の隣が彼だった。その時の講義内容は素描で、姿形が人間そっくりな自律人形をモデルに描くことだった。自律人形は、教室の扉を開けて中に入り、教授の言葉に従って台の上にポーズを取って佇んだ。

「あれでは、描く意味がないわ」

突然、ソフィーは描く対象の人形を見て呟く。

「・・・どうして?」

Vは、なんとなく彼女が彼に話しかけた気がしたので、戸惑いながら返答した。

「だって、あれには、心がないもの」

「・・・心?」

ソフィーの言ったことは、彼には分からなかった。その日、彼女は絵を全く描かずに、教授の元へ提出した。普段、成績優秀で、他の絵画制作においても優秀だった彼女が、全く何も描かずに白紙のまま提出したことに教授や周りの学生は驚愕した。彼女の不思議な性格の一面を見たVは、やがてその彼女が醸し出す独特の魅力に引かれていった。

ある日の午後、ソフィーは一人デッサン室で絵を描いていた。Vは、学生寮へ帰るため、デッサン室を横切った。その時、窓越しから絵を描いている彼女が彼の眼中に写った。彼は、彼女の存在に不意に惹かれ、一度立ち止まった後に教室の扉を開いた。

「・・・あなたは・・・」

「寮に帰る途中、窓越しから君が見えたんだ・・・。その、良かったら、俺と友達になってください！」

彼女のあまりの魅力に、彼は、困惑しつつも伝えたいことを述べることができた。それからしばらくして、Vとソフィーは互いを愛し合う関係となった。しかしながら、彼の幸せな日々は、長くは続かなかった。7年前の夏、惨劇は起こった。突如、大学の正門付近が何者かに爆破される。Vは教室で一人、絵画制作に励む最中、外から大きな爆発音が響き、教室の窓を覗いた。窓からは、犯人らしき人物が重武装で複数いることを確認出来た。彼らは銃器を手にして、大学の四方八方を乱射しながら東棟へ向かいつつあった。恐怖を抱いたVは、颯爽と教室を抜け、廊下を駆け抜けて、逃亡を試みた。彼らの目的は何なのか、何の為に大学を強襲するのか、考えている間もなく、彼は出口の方向へとただただ走り抜けた。

非常階段を降りる前に彼は立ち止まった。親友三人の安否が気になったためである。三人は無事に、大学から逃れられたのか、それとも未だ、教室の中で恐れながら隠れているだろうか。彼らが気になったものの、非常階段を降りることを選んだ。やがて、一階に辿り着いたVは、彼らに気づかれないよう、造形物や柱の物陰に隠れながら逃げた。その途中で、一階エントランスを徘徊する兵士二人に見つかりそうにもなった。動悸の激しい状態でVは、エントランスを抜け

た。ようやく、彼は助かったと思い込み、その場で呼吸を整えようとした。しかし、呼吸を整える場合ではないくらいの地獄絵図が目の前には広がっていた。道端や造形物の所々に血痕がこびりつき、学生の銃殺された死体や頭部を撃ち抜かれた教授の死体が無残に倒れている。前方には、幾人もの学生たちが兵士たちに囲まれている。Vは、今後、一切この光景が忘れられないくらい、目を大きく見開いて、ただ呆然と見ていた。あまりの恐怖に体が動かない。捕まえられた学生には、ダニエル、アレックス、そしてソフィーがいることに気がついた。兵士の一人が、ソフィーの髪を掴み、持ち上げた。彼女が苦しむ姿に、Vは、怒りと悲しみの感情を抱いて、彼女を助けようと試みたが、自身が周りと同じような無残な死を遂げるという恐怖の感情に打ち負け、その場から動くことができなかった。

「やめろ・・・!!」

兵士はソフィーの胸部に銃口を突き付け、一発の弾丸を放った。彼女の身体を貫通する弾丸。飛び散る血しぶき。兵士は、彼女の死体を投げ捨てる。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」

Vは、嘆き叫んだ。彼女との思い出がまるでVHSビデオテープが再生されたように、脳裏に浮かんだ。

彼の叫び声に、ダニエルとアレックスが気づいた。？

「裏門へ逃げろぉぉぉ!!!!!」？

「俺たちに構うな!!早く!!!!」

アレックスとダニエルが、これまでにVが聞いた以上の声量で叫んだ。Vは、三人を救えず、ただただ呆然としていた自身の弱さと愚かさに後悔しつつ、裏門へと駆け抜けた。駆け抜ける最中、聞きたくもない銃撃の音が耳に響いた。

その後、大学を強襲した連中は、グリフィン民間軍事会社の派遣する部隊によって、倒された。Vは、救急班に救われ、事件の事情を問われた。しかし、親友を失い、幸せな生活さえも奪われた彼は、全く言葉を返すことができなかった。

後日、連中は、ツェナープロトコルにエラーが生じた実験段階の戦

術人形によるものだったということが分かった。これには、Ｉ．Ｏ．Ｐ製造会社と鉄血工業製造会社という二つの工業メーカーが関わっているそうだが、両社は一切情報を開示しなかった。

二人の親友を失い、愛する人も失ったＶは、生きる価値も見出せず、深夜のＳ０７地区を放浪した。芸術家になる夢も希望も全て、崩された。身も心もボロボロの彼は、かつてダニエル、アレックス、そしてソフィーとよく通ったパブへ向かい、一杯の酒を頼んだ。天井に吊られたテレビに映るニュースは、大学襲撃事件について流れている。事件は、自律人形のシステムエラーが事の発端であること、死者が５００名を超えたということ、そして大学のみならず、周辺の住宅地域にも被害が及んでいたことを知った。酒を飲み終え、酒場を出た彼は、再び放浪し続けた。サイレンが鳴り響く救急車が何度も往復する路上を脚から血が出るまで放浪し続けようと試みた。

「いっそ、このまま死んでしまおうか」

やがて、見知らぬ通りに辿り着いたＶは、その場に倒れ込んだ。

「何しているんです、指揮官。そろそろ任務の時間ですよ」

「ほら、行きますよ。仲間も待ってますので」

Ｖはハッと意識が戻り、起き上がる。

「悪い。ぼんやりとしていた」

「また、過去のことを考えていたのですか」

「・・・あぁ」

「前方確認。敵はおよそ３０体いると思われます」

崩壊した摩天楼ビルの瓦礫の背後から４１６が双眼鏡で前方にいる敵を確認している。Ｖは彼女の反対側の瓦礫に隠れ、状況を確認している。彼の軍事会社では、彼が前線に立つ珍しい指揮官として知られている。

「ヴェスピドか」

「はい」

「よし。しばらく待機する。奴らが散らばった瞬間、こちら側は行動

する」
「了解」？「りょーかい！指揮官！」
「了解！」
「・・・」
　Ｇ１１からの応答がない。彼女は、如何なる時でも睡魔に勝てない人形である。
「Ｇ１１!!」
　４１６が、トランシーバーで彼女の名前を大声で叫び、彼女の眠気を払った。
「うわぁ！４１６！」
　Ｇ１１のトランシーバーから４１６の声が聞こえる。
「任務中よ！で、そちら側はどうなってる？」
「うーん・・・大丈夫。弾の装填は完了。問題ない」
「Ｇ１１、聞こえるか。俺だ。君は今、ショッピングモールの西棟と東棟を繋ぐレーンにいるはずだ。そこから、４５（フォーティーファイブ）と９（ナイン）の戦闘を援護してくれ」
「分かった・・・」
　少々、頼りのなさそうな返答が来たが、Ｇ１１の実力を侮ってはいけない。彼女の射撃の命中率はＡランクに位置している。更に、彼女が持つ銃の射速はＳＳランクといわれている。
　鉄血工造の人形たちに動きが見られた。Ｖは４０４小隊のメンバーに行動開始の命令を出そうと試みた。しかし、次の瞬間、彼らに予期せぬ事態が起きた。
「撃てぇ!!!撃ちまくれ!!!」
　三時の方向から、武装した民間兵が幾人もの現れ、鉄血工造の人形の元へ特攻し始めたのである。
「民間兵？何でここにいるの？」
　トランシーバーから予想外だった事態に驚愕しているＵＭＰ９の声が聞こえる。
「分からない。とりあえず、指揮官の命令を聞きましょ」
　彼女の隣にいるＵＭＰ４５は落ち着いた容姿で話した。

「指揮官、どうしますか？」
　４１６から連絡がＶの元に入る。Ｖは、突然の状況にどうすれば良いのか困惑していた。しばらくして、右腕に装着している通信機から司令部の連絡が届いた。
「私だ」
「Ｇ司令！」
「モニターから君たちの状況は十分把握している。民間兵の出現により、戸惑っているのだろう？」
「ええ、そうです。どうしますか？」
「Ｖ、今回の任務内容を覚えているか？」
　Ｖは眉間に皺を寄せた。当然、内容は把握している。
【現地に配置されている兵を全て射殺する】ですよね。それが何です？」？
「分かっているじゃあないか」
「・・・まさか」
　Ｖは、Ｇ司令の一言が残虐な行為を４０４小隊一同に求めていることを理解した。しかしながら、彼にとってそれが冷酷非道なものであると断定は出来ないものであった。
「以前、君たち小隊が戦った人類解放軍と呼ばれる愚かな連中に所属する部隊の一つだ。奴らの軍の目的は、ただ鉄血工造の人形を殺すのみならず、人形を捕らえ、軍の実験体にするのが本来の目的である。彼らの手に人形が渡れば、我々やグリフィンの行動に支障をもたらすだろう」
「要するに、殺せ、というわけですね」
「そうだ。頼んだぞ」
　Ｇ司令が連絡を切る。かつて人形とは異なり、同じ人間を虐殺することに少々気が引けるＶだったが、７年間、戦場に身を置いた今の彼自身にそのような考えを抱くことはなかった。今、彼がここに立つべき理由、あるいは彼が彼であるアイデンティティを確立できるのは、「復讐」にある。この不安や苦悩で満ち溢れた世界に「復讐」し破壊すること。それが、彼が彼であり続ける事のできる唯一の観念だか

らである。
Ｖは、自身のトランシーバーを強く握りしめ４０４小隊に命令を告げた。
「全メンバー！司令部からの連絡は聞いたな！行動開始！」
「了解。ＨＫ４１６、行きます」
「了解。始まるよ、９！」
「・・・了解・・・」
広場中心部に固まるヴェスピドと解放軍部隊の争いに４１６が介入する。解放軍部隊は支援が来たと思われたが、味方勢力の半分を４１６の手により射殺される瞬間を目の当たりにし、彼女に銃口を構え始める。しかし、４１６の速さに銃口を構える行動が追いつけず、撃たれてゆく。
「何なんだ!!アイツは!!」
「目標、ヴェスピド型モデルと一致しません！未確認です！」
「グリフィンの野郎か!?」
「はい！おそらく！」
崩壊した建物の背後で解放軍部隊のリーダーと通信部が身を潜めながら、４１６の行動を確認している。
一方、今にも崩れそうな路上をＵＭＰ４５とＵＭＰ９は颯爽と駆け抜け、広場右端のヴェスピド勢力に特攻する。？
「４５姉！受け取って！」
ＵＭＰ９は、ＵＭＰ４５に閃光手榴弾を投げ渡す。
「サンキュー！」
ＵＭＰ４５は、ＵＭＰ９から渡された閃光手榴弾を敵陣に目掛けて投げる。次の瞬間、眩い閃光が半径２．５ヤードの範囲内を光らせる。
「立ったまま死ね!!」
「消えちまえ!!」
ＵＭＰ４５とＵＭＰ９がそれぞれの銃でヴェスピドに弾丸を放つ。敵勢力はまもなくして、敗北する。
「やったね！４５姉！」

「うん！」
　彼女たちが、広場中心部の４１６とＶに合流しようとその場を離れようとした瞬間、ＵＭＰ４５の背後に左手を失ったヴェスピドの生き残りが銃口を向けて襲いかかろうとした。
「４５姉!!後ろ!!!」
「!?」
　突然の状況に、二人は自身の銃を構えることが出来ず、窮地に至った。ところが、遠方からの一発の弾丸がヴェスピドの頭部を貫通し、彼女たちは救われた。Ｇ１１による射撃である。
「だいじょうぶー？」
　Ｇ１１の連絡がＵＭＰ４５とＵＭＰ９に来る。
「大丈夫。ありがとう」
「助かったわ」
　その一方、Ｖと４１６は広場中心部の解放軍勢力に苦戦していた。
「チッ！こんな時に弾切れ!?」
「レッグホルスターのハンドガンを使うんだ。九発装填してある。残りの敵勢力には十分だ」
「それくらい分かってます！」
　４１６は右腿のレッグホルスターに差し込まれたハンドガンを取り出し、解放軍部隊を狙った。
「一人につき一発ってことになるわね・・・。大丈夫。私は、完璧」
　４１６は次々と、部隊の連中を一発の弾丸で仕留めていった。Ｖは、広場中心部を駆け抜け、これらの戦闘を指揮する解放軍部隊のリーダーを探した。すると、前方の瓦礫からアサルトライフルを持った解放軍の兵士が彼を狙撃し始める。？「何っ!?」
　Ｖは、すかさずビルの破片に隠れた。彼は、自身の拳銃に予備のマガジンを装填して応戦した。敵兵のリロードのタイミングを計らい、彼らの頭部を狙撃し返した。その後、４１６、そしてＵＭＰ４５とＵＭＰ９から敵勢力を全て駆逐したとの連絡が入った。残るはリーダーである。

「撤退だ!!」
「ダメです!!この先、道が塞がれています」
　通信部とリーダーは、行き止まりの路地に呆然として佇んだ。まもなくして、Ｖ率いる４０４小隊一同に見つかることとなる。
「くそっ!何とかならないのか!?」
　次の瞬間、リーダーの背後にいる解放軍通信部２名はＧ１１の銃弾によって射殺された。
「!?」
　４０４小隊は、リーダーの前に立ち塞がった。リーダーが、彼の左ポケットから拳銃を取り出そうとした途端、４１６が拳銃で彼の取り出す手を仕留めた。彼は、撃たれた手を片方の手で抑えながら、こちらを睨んでいる。
「一体、お前たちは何者なんだ・・・!!はぁ・・・はぁ・・・」
　Ｖは、リーダーの頭部に拳銃を突き付けて、以下の言葉を告げた。
「４０４小隊だ」
　彼は、自身の拳銃のトリガーを引いた。９ｍｍの弾丸が解放軍リーダーの頭部を貫通した。リーダーはその場にバタリと倒れ死んだ。
　専用ヘリが小隊の背後に着陸し、一同は搭乗する。ＵＭＰ９はＧ１１の頬を触っている。それを笑顔で見ているＵＭＰ４５。戦闘で疲れている４１６。ヘリの中で、Ｖは仲間と一切会話をすることはなかった。再び、過去の回想が脳裏に浮かんでしまったためである。

　７年前。二人の親友と愛する人を失い、生きる価値も見出せず、深夜のＳ０７地区を放浪した後、見知らぬ路上に倒れこんだＶは何者かによって連行された。
　彼は、目を覚ますと白色の患者服の姿で見知らぬ部屋のベッドで寝ていた。部屋は薄暗く、幅は狭い。彼は、まるでアクション映画に出てくる監獄に捕らえられたような気分に陥った。ベッドから起き上がろうとすると、前方のドアから誰かが入ってきた。漆黒のスーツを着用し、黄色のネクタイをつけた中年の男性が厳格な姿勢でこちら

を見ている。
「目が覚めたか」
「・・・」
「戸惑っている気持ちは分かる」
「ここは・・・どこです?」
　Ｖが質問すると、中年の男は返答した。
「とりあえず【要塞】と言っておこう」
「要塞・・・。あなたは・・・?」
「私は、Ｇ（ジー）だ」
「Ｇ?」
「とにかく、司令室へ来てくれ。ここを案内しよう」
　Ｖは、Ｇ司令に連れられて彼の司令室へと向かった。向かうまでの通路の小窓に写る景色から、この「要塞」と呼ばれる場所は海の上にあると分かった。Ｇ司令と彼が歩く中、前方から歩いてくる兵士たちがＧ司令に向かって敬礼を行っていた。
　司令室へ到着する。司令室の扉を兵士が開ける。Ｇ司令は司令部の席に座る。Ｖは、彼の前方に佇んだ。Ｇ司令は、席の前の机の上にある、およそ１００ページからなる文書を手に取り、読み上げる。
「君の全てを調べた」
「俺の・・・全て・・・?」
「コード２１１７。男性。日系人。２０歳。Ｓ０７地区中央大学芸術専攻二回。大学に通うまでは、Ｓ０７地区隔離施設で育つ。運動は苦手。好みは、芸術」
　Ｖは、施設の管理者や保護者以外は知らない自身の詳細をＧ司令が知っていることに驚いた。
「一体、どこから俺の詳細を知ったんですか?」
　Ｇ司令は、Ｖについて書かれた文書の続きを読み続けた。
「自律人形大学襲撃事件被害者。彼の親友、愛人３名が死亡・・・。以降、隔離施設時代の君の詳細が載っている」
「あなたは・・・あの襲撃に関与している人ですか!」
「待て待て。私は、関わっていない」

「じゃあ、どうして！」
「落ち着け」
　Ｇ司令は、文書を机に置いた。その後、席を離れ彼の背後の窓を見つめながら、Ｖに彼らが何者なのか述べ始めた。
「我々は、【Ｕｎｋｎｏｗｎ　／正体不明の】民間軍事会社。社名含め我々の全ては一切世間には開示しない。そう、仲間でさえだ。私は、その司令部を務める。本日、君には我々の理念と目的を伝えよう。ただし、伝えるからには、君は我々の一員となってもらいたい。それは、君を救う手段でもある」
「そんな！無茶だ。俺は、ごく普通の学生であって急に軍事会社に入れと言われても・・・」
「君は、親友を失い幸せと希望も失った。失礼だが、全てを奪われた君に何がある？君に残る考えは死への欲動のみ。そんなの、嫌だろう？」
「・・・あぁ、いっそ、このまま死んでしまえばいいんだ」
「それは良くない。【復讐】だ」
「・・・？」
「君を負の方向へと招いたこの世界に対する【復讐】さ。常に私利私欲のために生きる人類の順応主義体制への【復讐】、人が作りし自律人形の暴走により亡くなってしまった親友、そして君の彼女のための【復讐】をするんだ」
　Ｖは、両手で頭を抱えながら動揺する。どうして良いのかわからない不安、そして絶望が彼の心を蝕んでいく。
「さて、私の軍事会社に入るか、決めたかな？無残な死を遂げるより、入ることを選んだ方が十分正しい選択だと思うがね」
　Ｖは、両手で自身の顔を抑えて苦悶する。Ｇの【復讐】という発言やソフィーのこと、また、ダニエルやアレックスとの思い出がグルグルと脳裏に再生された。
「我々の理念と目的は、世界に広がる合理主義を崩し、新たな体制へ作り変えること。大袈裟に言えばね。普段は、上層部から依頼された仕事をこなすことかな。それは、決して世界を救うことではない。そし

て、我々の行いが悪いものとも見なされるかもしれない。しかしながら、我々は、我々の理念と目的を信じて戦うのだ。さぁ、どうだ。君は幸せを奪った者への【復讐】をするべきだ。己を信じて戦え」
Ｖは思い悩んだ末、怒りと絶望の感情が増したが故なのか、Ｇ司令の軍事会社に入ることを選んだ。彼は、Ｇ司令に託された契約書にサインを記した。
「そうだ・・・。それでいい・・・」
その後、Ｇ司令はＶの前に立ちはだかり、右手を彼の肩に置いた。
「それと、君のネームを今日から変更する。番号じゃ、呼びにくいからな」
Ｖは、あらゆる感情に自身が押しつけられて、何も言えずに俯いている。
「では、Ｖｅｎｇｅａｎｃｅの〝Ｖ〟。これからは君をＶと呼ぶことにする。それでいいか？」
「〝Ｖ〟（ヴィー）・・・分かりました」

「指揮官・・・。指揮官・・・。大丈夫ですか」
Ｖは、４１６の声でハッと意識を戻した。左右を確認し、自身がヘリの中にいることを改めて認知した。
「もうすぐ、基地へ到着しますよ」
「あぁ、分かった」
「基地が見えてきたよ！」
ＵＭＰ９が、ヘリの窓から基地全景を覗いている。同じく、ＵＭＰ４５も窓を覗き始める。
「夕焼けに照らされて綺麗ね」
Ｇ１１は、ヘリに配置された救急用ベッドの上で寝ている。４１６は、Ｖが再び過去の回想に苦しんでいたことを把握して心配している。
「大丈夫だ、４１６。ちょっと、考え事をしていてね」
「そうですか」

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２

深夜。Ｖは、要塞内にある彼の部屋で蝶事件に関する報告書を読んでいた。

昨年の夏真っ只中のことである。国家安全局所属のある特殊部隊が、鉄血工造本部工場の奥にある技術部門に潜入し、「エリザ」のプログラムデータを強奪する作戦を実行。「エリザ」というのは鉄血工造の人形技術から生み出された高度ＡＩシステムのことである。このシステムが司令塔となって、他の戦術人形を、ネットワークシステムを利用して、遠隔操作ができるというものだ。この技術の裏にいる開発者である元９０ｗｉｓｈメンバー、リコリスは、原因は定かではないが国家安全局らに命を狙われていた。事実、本作戦は失敗に陥った。部隊が、技術部門に潜入を試みた時、リコリスは背後から、彼らを発砲。部隊の一名が彼の放った弾丸に被弾。止むを得ず、部隊はリコリスに発砲。この時、彼は死んだと思われたが、奇跡的に生存しており、彼は必死の覚悟で、防衛システムを発動。そして、彼は自身の命が尽きる前に、実験段階であるＡＩシステム「エリザ」も起動させる。このため、工場全ての人形が起動され、防衛システムを実行し、特殊部隊、工場内の従業員、そして人形全ての者が殺害された。この事件を我々は「蝶事件」と呼び、全人類が人形に対抗するきっかけとなったのだった。

「部隊、配属兵、リスト・・・・戦術人形・・・」

部隊に所属していた兵士と戦術人形の写真が載っている。リストの中には、４０４小隊隊長のＵＭＰ４５がいる。その当時の彼女の写真は、左目に傷跡はなく、今よりも明るい容姿で写っている。彼女の詳細の下欄には、彼女の姉に当たるＵＭＰ４０の詳細が載っている。

「ＵＭＰ４０。戦術人形・・・鉄血工造最新型モデル・・・戦死・・・」

彼女は、この事件で戦死した戦術人形である。彼女の死は、ＵＭＰ４５がよく知っている。彼女の左目の傷跡が、この事件の悲惨と愚かさを物語っている。　Ｖが、報告書を読むのに集中していると、誰

かが彼の部屋の扉をノックする音が聞こえた。
「指揮官。入りますよー」
ＵＭＰ４５の声だ。Ｖは、慌てて報告書を机の上に裏返して置き、更にその上に筆記用具箱を上に置いた。部屋の扉が開く。普段着用する戦闘服とは異なり、カッターシャツ、そしてスキニーフィットの黒ズボンを着用したＵＭＰ４５が、コーヒーを二つ、両手に持ちながら、入ってくる。
「４５？ど、どうした？」
「今日は、なんか、眠れなくてね。それで、給湯室でコーヒーでも入れて、ちょっと夜更かししようかなって。廊下を歩いていたら、指揮官の部屋から光が漏れているのが見えて、起きてるのかなーと思って」
「それで俺の分まで持ってきてくれたってこと？」
「そう」
Ｖは、彼女にバレないように、ゆっくりと報告書と筆記用具箱を机の端に寄せる。彼女が、僕の隣にやって来る。
「はい、これ。ホットで良かった？」
「ありがとう。あぁ、問題ない。夜の海は、少々寒いからな。身体にジワジワと寒さが伝わってくる」
「そうね。ま、この淹れたてのコーヒーを飲んで、温まりましょ」
Ｖは、彼女の分の椅子を部屋の端から持ってくる。彼女は、椅子にコーヒーがカップからはみ出さないように、ゆっくりと腰掛ける。そして、コーヒーの表面に、フゥーっと息を吹きかけた後、そっと口に運ばせた。Ｖは、彼女のコーヒーを口に運ばせる一連の動きを見て、彼女が「人形」ではなく人間そのもののように感じた。
「美味しい。ほら、指揮官も飲んで」
「あ、あぁ、飲むよ」
彼女の淹れたコーヒーは美味しかった。俺の淹れたものよりも。
「・・・美味しい」
「ふふ、良かった」
Ｖは、７年振りに人に美味しい飲食物を頂いた気がした。彼は、無論これはただのインスタントコーヒーではあるが、誰かの為に作る

ものは何でも美味しいものだと思えた。そして、それは会話が弾むと食事がより美味しく感じられることと似たようなものだと考えられた。
「ところで、指揮官。こんな夜遅くに何してたの？」
「え？あぁ、君と同じく、僕も眠れなくて・・・机の上で、ちょっと考え事を」
Ｖは、彼女に嘘をついた。報告書を見ていた、と正直に言えば、彼女は再びあの時を思い出して悲しむだろう。
「そう・・・。何を考えていたの？」
「・・・別に」
「・・・そう。他人に言えないことなのね」
「あぁ」

２０６１年夏。Ｇ司令が、Ｖに極秘任務を依頼した。それは、国家安全局の特殊部隊に彼が所属し、安全局の情報を盗むといういわゆるスパイ作戦に当たることである。同時に、Ｇ司令は国家安全局が３ヶ月前に手に入れた鉄血工造の最新型モデルＵＭＰシリーズも奪う依頼もＶに頼んだ。
「これは重要な任務だ。失敗は許されない」
「了解。任務を遂行する」
身元を捏造した書類を提出し、Ｖは国家安全局の特殊部隊の隊員となった。
４年前、元９０ｗｉｓｈメンバーであるペルシカリアと呼ばれる女性がＩ．Ｏ．Ｐ製造会社との協定を結び、１６ＬＡＢ研究所を設立した。彼女の研究は順風満帆であり、ＡＳＳＴ技術という新技術を開発させ、第二世代の戦術人形が生み出された。当時、Ｖ率いる部隊の人形達は既に第二世代モデルだった。しかし、これらの技術とは異なり、鉄血工造独自の技術で生み出された最新モデルがＵＭＰシリーズだった。つまり、彼女達と他の戦術人形が生み出された会社は異なっている。Ｇ司令は、比較的、１６ＬＡＢの第二世代人形よりも高度なシステムを搭載した鉄血の最新モデルの技術を、我が社の力の象徴と

戦争の抑止力として、強奪をＶに依頼したのである。国家安全局上層部は、Ｖを戦術人形所属部隊の指揮官に任命した。

Ｖが、安全局戦術人形所属部隊の指揮官に任命されてから二週間が経った。彼が、射撃場へ向かうと射撃訓練中のＵＭＰ４５とＵＭＰ４０の姿が見られた。

「４０、私、射撃が上手くならないわ。指揮官に怒られてしまう」

「大丈夫。あたいの言った通りに練習すれば、問題ないさ」

「うん。・・・あ、指揮官！」

「お疲れ様です！」

彼女達は、Ｖに気づき敬礼をする。彼も彼女達に敬礼をした。

「４０、彼女の狙撃は上手くなっているか？」

「はい。順調です」

「そうか。君たちの初任務まで、あと三日だ。お互い、気を引き締めて戦いに備えてくれ」

「はい！」

「了解！」

「ごめんなさい。４０。順調、なんていう嘘をついてくれて」

「いいってことよ。さぁ、頑張ろう！」

Ｖは、安全局上層部の作戦室に向かった。部屋には、司令官や議長などが会議机を囲んで座っている。彼は、机の端の空いた席に腰掛ける。

「では、指揮官が着席したので会議を続行する。三日後の作戦内容についてこれから話す」

「本作戦は、鉄血工造技術部門最高責任者リコリスを捕獲し、鉄血工造最新ＡＩ技術【エリザ】を強奪するものである」

「近年、各地に位置する民間軍事会社の権力が、社会のリズムを揺るがしつつある。我々は奴らの圧力により、崩壊寸前へと追い込まれている。リコリスの技術成果である【エリザ】が、各地に蔓延る軍事会社の手に渡る前に、【エリザ】システムを我々の手で奪うのだ」

「本作戦は、いずれ世間に知れ渡る場合があります。議長、その時はど

のようにお考えになられているのでしょうか？」
「極秘作戦だ。深夜、作戦を決行すると想定している。また、その件については、司令官が全てのプログラムを構想しているだろう。そうだろ？」
「ええ。全て計画通りに実行できるかと」
「よろしい。では、会議を終了する。司令官は、指揮官に詳細を伝えておけ」
上層部の議長や各部署最高責任者などが作戦室を出る。司令官は、Ｖを含め三名の指揮官に当日の作戦の詳細を伝えた。

三日後。鉄血本部工場奇襲作戦が深夜決行された。Ｖ率いる戦術人形所属部隊は、鉄血工造本部最深部の兵器工場での制圧を担当した。戦術人形たちはＶの指揮に従い、工場の最深部警備隊の連中を射殺していった。ＵＭＰシリーズの二人には、工場中心部の見張りを頼んだ。Ｖは、残る戦術人形を連れ工場の奥へ奥へと進んだ。
すると、別の指揮官から連絡が届いた。
「こちら第二部隊。リコリスを発見した。連行する」
連行は、上手くいったと思われた。だが、第二部隊指揮官の連絡から二秒後、遠方から一発の銃声が響いた。リコリスが第二部隊指揮官を射撃したのである。撃たれた指揮官は、隊員に止むを得ず彼の射殺を命令する。射殺命令を聞いたリコリスは自身の死を恐れ、二発目を指揮官に撃った。数秒後、第二部隊隊員の拳銃によって放たれた弾丸が、彼の胸部に当たりその場に倒れた。
「こちら第二部隊所属。指揮官がリコリスの手によって殺害されました。また、指揮官による命令により、リコリスを射殺しました。司令の命令を願います
「何だと!?・・・分かった・・・。全部隊、帰還しろ」
「了解」
「了解」
「了解」
Ｖは、残る戦術人形と共に最深部から抜けようとした瞬間、事件

は起こった。
「くぅ・・・僕はまだ死んでいない!死んでいないぞ・・・」
技術部門研究所で胸部を撃たれ瀕死状態のリコリスが、動かすことのできる左手を前へ前へと動かし、全身を彼のコンピューターの前まで運ばせた。床には、匍匐によってこびりついた彼の血痕が、コンピューター前まで直線上に続いている。
「防衛システムとＡＩを起動させ・・・る・・・」
彼は、必死の力でコンピューターのエンターキーを押した。すると、工場内の戦術人形全てが突如、起動し始めた。
「《防衛システムが作動されました。工場内にいる方は、速やかに避難してください》」
「《・・・私は、エリザ。人形たちよ、私の命令に従え》」
Ｖは、工場内の警報が突如謎の少女の声に切り替わったことが分かった。後に、兵器工場内の全ての人形が動き出し、彼の指揮する戦術人形の大半を抹殺していった。
「何なんだ!?一体、何が起こっている!?」
急いでＵＭＰシリーズのいる工場中心部へ戻ろうとした。残る戦術人形は、彼を庇いながら起動した数十体の鉄血兵器の銃弾の雨に撃たれて亡くなった。
「くそっ!!!!ＵＭＰ４０！４５！どこだ!?」
彼は、颯爽と彼女たちの元へ駆け抜けた。途中、第一部隊、第二部隊からの連絡が来るものの、その連絡はまもなくして消息を絶った。
「第一、第二とやられたか!!まずいぞ・・・」
その時、ＶはＧ司令の言葉を思い返した。失敗は許されない。必ず、情報を持ち帰り、ＵＭＰシリーズを捕獲する。そう、これが本来の任務である。
兵器工場緊急用脱出経路。ＵＭＰ４５とＵＭＰ４０が佇んでいる。
「彼らが防衛システムを起動したわ。これが何を意味するのか知って

るわよね」
「精神を破壊するつもりなのね。それじゃ、私たちここで死んじゃうの？」
「いえ、死ぬのは私たちのどちらかだけよ。私たちのどちらかが消えれば、一方は助かる」
　防衛システムは、単に鉄血工造以外の人形やその他対象物を攻撃するシステムではない。数分後には彼女たち自身も自害する運命にあるという残酷なものである。ＵＭＰシリーズは鉄血工造モデルであるので、これらのシステムは無論、搭載されていた。しかし、ＵＭＰ４５はＵＭＰ４０の分子的モデルであるので、一方が破壊されれば、もう一方はシステムの影響を受けずに生き残ることができる。ＵＭＰ４０は、これらのシステムを既に知っており、彼女はＵＭＰ４５に生きる希望を託したのだった。
「ぐずぐずしている場合じゃないのよ！４５！　あなたも一緒にここで死ぬつもり!?」
「４０、私は・・・」
「さぁ、私たちを変える、その時が来たの」
「さぁ!!!!」
　その瞬間、Ｖは彼女たちの元へ辿り着いた。しかし、既に事態は遅かった。
「何してる!!??　４５!?　よせっ!!!!!　やめろ!!!!」
「あぁぁぁぁぁ!!!!」
　ＵＭＰ４５が、ＵＭＰ４０の頭部を自身の短機関銃で撃ち抜いた。４０は、一瞬の笑顔を彼女に見せ、その場に倒れ死んだ。ＵＭＰ４０の頭部から、人工的に作られた血液がダラダラと流れ始めた。ＵＭＰ４０の死を見たＶは、彼のかつて愛したソフィーの死の瞬間と重なった。ＵＭＰ４５はＵＭＰ４０の側で泣いている。
「どうして・・・こんなことに・・・」
　ＵＭＰ４５が嘆き悲しんでいる。Ｖは、彼女の肩に触れて彼女に脱出を説得することを試みた。
「４５・・・、彼女の件は後で聞く。早く脱出するぞ！」

「イヤよ!私も、ここで・・・」
「何、バカなことを言ってるんだ!!さぁ!!」
Ｖは、ＵＭＰ４５に手を差し伸べた。彼女は動揺しつつ、ゆっくりと彼の手を握った。その後、彼とＵＭＰ４５は急いで脱出経路を駆け抜け、Ｇ司令が予め用意していた自動操縦ヘリの元へ向かった。無事に、彼らは生還することが出来た。
「これは罠だったんだ。俺たちは安全局の捨て駒に過ぎなかった」
「・・・」
ＵＭＰ４５は、搭乗席でＵＭＰ４０の死を悼んで俯いている。Ｖは、安全局は本作戦において全部隊の安否を一切確認することなく、向かう先は死のみである特殊攻撃を目論んでいたことを察した。
「安心しろ。もう安全局へは向かわない。事実、俺は安全局のスパイだったんだ。目的は、君を入手すること、そして本作戦に関わる情報を盗むことだった。今から、要塞へ向かう」
後日、国家安全局上層部は、鉄血本部工場奇襲作戦に携わった特殊部隊メンバーは全員、戦死と表明した。作戦結果は失敗。作戦について世間に情報が流出されなかったものの、彼らは多大な損害を得た。
Ｇ司令は、司令室にＶを呼んだ。
「よくやった。ＵＭＰ４０は得られなかったが、ＵＭＰ４５と安全局の情報を得ることが出来たことに、君を賞賛しよう」
「はい・・・、ありがとうございます・・・」
Ｇ司令は、彼の肩を叩いて笑みを見せる。
「なーに、決して君は悪くない。全ては、安全局の計画の内だったのさ。ＵＭＰ４０の犠牲をも、全て」
「はい・・・」
「しかし・・・、奴らは失態を犯した。【エリザ】を暴走させてしまったことだ。これから、我々の敵は、鉄血工造の兵器がメインになりそうだな」
「・・・」
Ｖは、Ｇ司令に敬礼を行って司令室を出た。

給湯室。鏡の前に、ＵＭＰ４５が悲しげな表情で佇んでいる。右手には、サバイバルナイフを持っている。彼女は、ナイフを持った右手を自身の左目に近づけ、垂直に傷を付けた。彼女は、己の弱さと愚かさを乗り越え、亡くなった仲間やこの混沌に満ちた世界への【復讐】を胸に刻み込んだ。

Ｖは、給湯室の彼女に出くわした。

「４５?その傷は・・・」

「指揮官、私は、あなたの元で一生戦い続けることを誓うわ」

「・・・・」

「私は、もう、弱くなんかない」

「指揮官。寝ているの?」

ＵＭＰ４５がＶの肩を揺する。彼は目を覚ました。

「４５?今、何時だ?」

「何寝ぼけてんのよ。まだ夜中よ。ほら、コーヒー冷めちゃってるよ」

コーヒーカップを触る。

「悪い」

Ｖは、生ぬるいコーヒーを飲み干した。

「もう、指揮官。もう一杯入れてこようか?」

「いや、今日はもう大丈夫だよ。ありがとう。ようやく、寝られる気がする」

彼は、部屋の片隅のベッドへ向かい、そのまま仰向けになって寝た。

「そう。良かった。・・・おやすみ、指揮官～」

ＵＭＰ４５が耳元で囁いた。その後の彼女の行動は分からなかった。Ｖの耳には、グシャグシャとまるで紙を丸めるような音が波の音と共に微かに聴こえた。?翌日、机に置かれていたはずの報告書は、跡形もなく消えていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３

太平洋に浮かぶ要塞施設。Ｖが、指揮官として務める民間軍事会社である。この要塞施設は、彼の出身地であるＳ０７地区と程遠い距離にある。また、要塞エリアの放射能汚染度は極めて低い。かつて、施設は某海上保安部のための施設として使われていたそうだが、３２年前のあの忌々しい事件により放棄されたといわれている。Ｇ司令は、資金を募りこの施設を彼の軍事会社施設として引き取った。

作戦室。Ｇ司令は、室内の側面のモニター上に映る上層部と話している。

「今回は、我々から直々にそちらに依頼する」

モニターから、上層部の幹部一名が厳格な表情でＧ司令に伝える。

「何でしょう？」

Ｇ司令は、返答する。

「Ｓ０９地区の密林地帯にて、グリフィン部隊と鉄血勢力の抗争が見られた。部隊は、現在窮地に立たされている。至急、彼らをそちらで援護してくれ」

「了解しました。任務内容について、至って我々には容易なことです。ですが、何故我々が奴らの援護をしなくてはいけないのでしょうかね？」

「・・・金だよ」

Ｇ司令は、顔をしかめた。

「グリフィン保安諜報部の緊急依頼によるものだ。諜報部は、あちらの総司令のやり方に不満があるそうでね。心配するな。我々の詳細は、極秘案件として片づけてくれるそうだ」

「ふん・・・なるほど、分かりました。任務は、４０４小隊に依頼することにします」

「頼んだぞ」

続けてモニターから、別の幹部がＧ司令に話しかける。

「Ｇ司令」

「はい。何でしょう」
「４０４小隊の指揮官についてだが、現在の彼の様態はどうなっている？」
「彼ですか。全く、問題はないですよ。以前の彼とは別物です」
「では、任務を頼んだ。こちらからは以上だ」
　モニターの通信が切れる。
　正午。施設のヘリポートの上に、Ｖは蒼い空を見上げながら佇んでいる。海上の空は、快晴で清々しい。数分後、彼は濁りのない空を眺めながらぼんやりしていると、Ｇ司令から突如呼び出された。急いで作戦室へと向かい、Ｇ司令の前に立った。
「急で悪いな」
「いえ。問題ありません。用件は何でしょう？」
「君に新たな任務だ。Ｓ０９地区にて、現在、グリフィンの部隊と鉄血勢力の死闘が繰り広げられているそうだ。それで、部隊が窮地に立たされている。至急、彼らの援護に当たってくれ」
「分かりました。しかし、どうして我々がライバル会社の部隊の援護をしなくてはいけないんでしょうか？」
「上層部の依頼だ。異論は認められない」
　Ｖは、眉間を寄せた。
「心配するな。君は、気にすることはない」
「・・・分かりました。任務を遂行する」
「頼んだぞ」
　彼は、緊急招集室へ向かった。テーブルの上のマイクの電源を入れ、ＵＭＰ４５、ＵＭＰ９、Ｇ１１そして４１６に招集命令を出した。
「ほら、起きなさい。指揮官の前よ」
「ふわぁぁ」
「人の前であくびをしない！ほら、しっかりと立って！」
「ふふ、まるでお母さんね」
　ＵＭＰ９が、４１６がＧ１１の服を整える姿を見て笑っている。
「うるさいわよ！」
「・・・で、指揮官。今回の任務は何？」

ＵＭＰ４５が質問する。Ｖは、彼女たちに任務内容を伝えた。
「以上。各自、作戦準備！準備の出来たメンバーは、ヘリポート、専用ヘリ前まで!!」
「了解」
「りょーかい！」？
「了解！」
「分かったー」
４人は、緊急招集室を出る。僕は、自身の武装を取りに行くため、施設地下２階技術室へ向かった。
技術室にて。天才少年の整備士デールが、Ｖの装備品を取り揃えている。
「お前の象徴といえる、このマスクもしっかりと改良しておいてやったぜ」？
「ありがとう。これで、顔に銃弾は受け付けないな」
「あぁ、でも何発も撃たれると流石に保たないぜ」
戦闘時において、Ｖはマスクを被っている。これは、デールが鉄血工造軍用作戦機甲「イージス」の頭部システムと外装を模して発明したものである。色は、光沢のある黒色で統一されている。通気性や、視界はこれといって悪くないもので、あらゆる戦地において頼り甲斐のある装備である。その黄色に輝く眩い眼光部分は、解放軍の連中や他反戦団体の連中を恐怖へ陥れる。
「俺たちのイメージカラーは黄色だからな！目の部分は黄色なのさ」
「なるほどね」
「武器は、いつものＭ１９１１Ａ１とヒート・ナイフ２本の三点だな」
Ｖは、ナイフを腰のホルスターに差し込みＭ１９１１Ａ１をショルダーホルスターに差し込んだ。
「にしても、よくそんな古臭い拳銃使うもんだなぁ」
「俺はこれが好きなんでね」
「おっと、予備のマガジンもな。忘れんなよ！」
腰のマガジンポケットに予備マガジンを挿入した。
「くれぐれもジャムには気をつけろよ」

「あぁ、分かった。気をつけるよ」

Ｓ０９地区。密林。グリフィンの新任指揮官ジャンシアーヌと彼女の部隊に所属する戦術人形らが、敵勢力に囲まれている。密林の中は、圏外で本部との連絡が通じない状況にあった。

「指揮官、もうダメです！」

「諦めないで！全ての弾が無くなるまで撃ち続けて！」

彼女たちの背後にいる数十体の鉄血兵器プラウラーが押し寄せて来る。

「ステンが瀕死状態です！」

スコーピオンが、瀕死状態のステンＭＫ―Ⅱを庇う。

「スコーピオン・・・、私のことはいいから・・・」

「良くない！全員で生きて帰らなきゃ！」

ジャンシアーヌの拳銃が弾切れになる。

「畜生！」

彼女は、弾切れの拳銃を投げてリッパーの頭部に当てた。しかし、残るリッパーが彼女の前に立ちはだかる。前方には、数十体のリッパーが、そして後方にはプラウラーがますます押し寄せて来る。左右にはイェーガーがライフルを構え、いつ狙撃されるか分からない絶望の事態に陥った。まもなくして、戦術人形たちの弾丸も底をつき、彼女達は完全包囲されてしまった。

「これまでなの・・・？」

彼女が死を決したその時、上空に見知らぬシンボルマークの入ったヘリが現れ、３つの発煙手榴弾が目の前の敵勢力の元へ落とされた。

「!?」

ジャンシアーヌは煙の中、誰かが地上へ降下し、目の前の敵を攻撃する影を目にする。前方の敵の影は一瞬にして消え去る。

「こっちだ！」

左から、誰かが彼女たちを呼んだ。ジャンシアーヌは正体不明の声に従い、仲間の戦術人形と共に左方向へ駆け始める。数分後、彼女

と仲間の戦術人形たちは、見事密林の奥へ逃げ切ることが出来たのだった。

数分前。

「あれが、グリフィンの部隊か。奴らに完全包囲されている。４５、ヘリから発煙手榴弾を落としてくれ。部隊には当てるなよ」

「当てるわけないわよ。了解。」

Ｖは、ヘリの操縦士に高度を落としてくれと頼んだ。ヘリは、地上から約６メートルの高さに留まった。その瞬間、ＵＭＰ４５は、グリフィン部隊を包囲する敵勢力に目掛け、３つの発煙手榴弾を落とした。

「総員、戦闘準備！４５、９、そして４１６は地上から攻撃せよ。Ｇ１１はヘリから、左右の邪魔なイェーガーを射殺してくれ」

「了解」

「りょーかい！」？

「了解！」

「分かったー」

彼は、三人と共に地上へ降り立ち、窮地に立たされていたグリフィン部隊を探した。４１６は、後方のプラウラーの始末を担当した。ＵＭＰ９とＵＭＰ４５は、グリフィン部隊の前方に立ちはだかるリッパーを、あっという間に蹴散らした。数分後、左右のイェーガーを殲滅させたとの連絡がＧ１１から入った。身動きのできないグリフィン部隊の影を見つけたＶは彼らを大声で呼び込み、部隊は声を頼りに、自身の方向まで疾走し始めた。密林の奥へ駆け抜けるＶとグリフィン部隊。駆け抜ける最中、イェーガーに出くわしたものの、奴らは発砲までの準備が遅いため、Ｍ１９１１Ａ１で射殺することは容易だった。逃げ切れたグリフィン部隊のジャンシアーヌは、Ｖの姿を見て驚いている。

「あなたは一体・・・？」

Ｖは周りを見渡し、敵兵がいないことを確認した。

「グリフィン本部に、予め、こちら側から救出要請と現在の位置情報を

連絡しておいた。安心しろ。すぐに救急ヘリは来るだろう」
「ありがとう。助かったわ」
　彼女は、不敵な容貌であるマスクを被ったVをじっと覗いた。
「あなた・・・名前は？」
「・・・〝V〟と呼んでくれ」
「分かったわ。よろしく、V」
　彼女は、右手を彼の前に差し出した。Vはジャンシアーヌに握手を交わした。
「私は、グリフィン第一部隊所属指揮官ジャンシアーヌよ。以後、よろしく」
　すると、416から連絡が来る。Vは、応答する。
「了解。今から戻る」
「待って。まだ、あなたの部隊を聞いていない！」
「悪いな」
　彼は、彼女の言葉を聞かずに小隊メンバーの元へ向かった。

【正体不明の】軍事会社上層部。海上要塞とは異なる場所に彼らは存在する。彼らのアジトは、G司令でさえ分からない。

　アジトの会議室にて、幹部4名が話し合っている。
「グリフィン部隊救出の任務は遂行出来たそうだな」
「あぁ。Gの言葉通り404小隊により遂行させたらしい。更に我々は、新しい情報を彼の報告書から入手した」
「新しい情報というのは？」
「奴らの部隊の指揮官が新手だったそうだ。AR小隊が第三セーフハウスにて襲撃を受けた頃、新任指揮官の入社式が本部内であったそうだ」
「ほう、仲間が襲撃を受けているというのに、気楽だな。全く、愚かな連中共だ。・・・となると、昨年の春に生じた戦術人形HK　416の件については、どうやら葬り去ったようだな」
「左様」

「今後、奴らの新任指揮官とその部隊の件については、Ｇとその部下に任せよう。異論はあるか？」
「ない」
「ない」
「会議を終了する前に、一つ、新たな情報を言い忘れていた」
「何だ？」
「我々の宿敵が、再始動、したようだ」
「７年前のＳ０７地区襲撃事件の指導者がか？奴は、５年前に第三部隊が処理したんだろう？何故だ？」
「それは、面倒くさいことになるな。Ｇにはこちらから報告しておくとしよう」

その日の夜。Ｖはヘリポートの上に佇み、星々が綺麗な空を見ている。施設中央出入り口から非武装姿の４１６がやって来る。
「ここに居たんですか」
「４１６」
「何をしているの？」
「・・・星を見ていたんだ」
「指揮官って、戦う時と戦わない時とで性格が異なりますよね」
「誰だってそうだろう？君だって」
「そうですか？」
４１６は、彼の側へ近づき、同様にして空を見上げる。
「自ら光や熱を出して輝く星を恒星、そして太陽の光に照らされて輝く星を惑星というんだ。知ってたかい？」
「そうなんですか。綺麗ですね・・・」
彼女は、微笑んだ。
「指揮官・・・。星は、どうしてあんなに綺麗なんですか？」
「・・・どうしてだろう。我々が、星を綺麗だと感じた発端は我々でさえも分からない」
「そうなんですか。不思議ですね」
その瞬間、冷たい夜風が彼女のライトシアンの髪をなびかせた。

髪は、星のように綺麗な輝きを見せた。
「おそらくね。光り輝くものは何でも美しく綺麗に見えてしまう。そう、君も」
「変な冗談よしてください」
　顔を赤くした４１６が、何処からか取り出したナイフをＶに突きつける。
「冗談だよ。悪かった」
「・・・許します」
　Ｖは、その夜見た美しい光景がもう二度と感じることはないだろうと諦めていたものの再び見つけることの出来た幸福とある種の希望として彼の心の片隅に残り続けるだろうと思えたのだった。

　三日前の午後。現在、利用されることのないＳ０７地区鉄血工造技術施設最深部にて、ある一体の第一世代戦術人形のマスターモデルが突如目覚めた。彼の〝目覚め〟には誰もが望まない最悪の事態にＶ率いる４０４小隊一同は陥ることとなる。

前編　―　完

過去のない男【中編】

Ｅｐｉｓｏｄｅ　４

２０６１年１２月上旬。ある日の午後、４０４小隊指揮官〝Ｖ〟（ヴィー）は、要塞施設のヘリポートに配置された休憩所の椅子に腰掛けていた。彼は、広大な蒼い海を眺めながら、４年前を思い出していた。彼が、胸ポケットから煙草を取り出そうとした時、背後から見覚えのある女性が群青色の美しい髪をなびかせてやって来た。

「やっぱり、あなたね」

「メアリー…」

「久しぶりね。一ヶ月ぶりってとこかしら。調子はどう？」

「まあまあだな」

メアリー・Ｋ・カサット。年は２６。第二小隊隊長。４年前、Ｖと同じ部隊に所属する兵士だった。彼らが、最初に出会った時もこの休憩所だった。彼女は、先日まで南極連邦の地上攻防戦で戦っていた。しかしながら、メンバーが瀕死状態に陥ったため、急遽、要塞施設に撤退することとなった。

「遅いけど、指揮官昇格おめでとう。聞いたところによれば、あなたの部隊は戦術人形で構成されてるって？」

「あぁ。もう、会ったか？」

「いえ、まだね。見てみたいわ。第二世代モデルなんでしょ？私たちそっくりの」

「そうだ。今は、デールの研究所でメンテナンスの最中だろう。また、君のことを紹介しておこう」

「ありがとう」

×　　×

「攻防戦はどうなった？」

Ｖがメアリーに尋ねると、彼女はゆっくりと俯いた。

「失敗したわ…」

「失敗…？」
「私の作戦の計画が甘かった。アイツら、ゲリラのくせして鉄血の大型兵器ぶっ放してきたのよ！」
メアリーは、手に持っていたコーヒー缶を握り潰した。
「おかげで、メンバーは瀕死状態。くそ、いつか必ず仇を取ってやる。でも、幸運にもなんとか全メンバー無事に帰還できたわ」
「そうか…。大変だったな」
「ええ、本当に」
「鉄血の兵器か…」
Ｖは、蝶事件を思い出した。あの恐るべき鉄血の製造された多くの戦術人形が暴走した瞬間、そしてＵＭＰ４０の死が脳裏によぎった。
「どうしたの？」
「いや、何でもない」
「そう」
Ｖは、吸い終わった煙草を椅子の隣に置かれた灰皿に捨てた。そして、胸ポケットから新しいものを取り出し、ズボンのポケットからマッチを取り出して先端に火を付けた。
「あなたとここで座っていると、時間の流れがゆっくりと流れているように感じるわ」
「なぜ？」
「分からない。あなたが、何考えているか分かんないからかな」
メアリーがくすくすと笑う。
「悪い」
「あはは、ごめんなさい。冗談よ」
Ｖは頭上に煙を吐いた。煙は海風と共にまもなくして消え去った。
「実は、さっきまで、４年前のことを思い出していた。そしたら、君が偶然のように現れたから、驚いて」
「４年前ね…。そういえば、私とＶが初めて出会った所もここだった」
「そうだな。懐かしい。あの頃の自分は今と違って弱かった」
「本当に？だって、射撃試験と筆記試験、高得点だったじゃない。」

「試験はな。日頃の練習、そして学ぶ姿勢さえ良ければ出来るものだった。そうじゃない。弱いのは自分自身だ。いつまでも愛人の死を引きずっていたし、あの日に味わった死の恐怖と絶望が少なからず残っていた」
「そうなんだ…」

４年前の６月。軍事会社第二小隊の選抜試験が新米兵士の元で行われた。試験内容は様々な分野に分けられており、その中の三項目を自由に選び、その結果に応じて選抜されるというものだった。Ｖは、射撃、格闘、そして筆記を選んだ。二日後、彼は、試験結果の連絡が各兵士のそれぞれ持っている小型電子パネル装置に届くのを、ヘリポートの休憩所に配置された椅子に腰をかけながら、待っていた。その時、同じくして試験結果の連絡を休憩所で待とうと考えていたメアリーは、Ｖの座る椅子の元へ向かった。これが、彼女と彼の初めて出会うきっかけであった。
「隣、いいかしら？」
「あぁ、構わない」
「あなたも、結果待ち？」
「そうだ。君も？」
「ええ。メアリー・Ｋ・カサットよ。よろしく」
メアリーが、笑顔で右手をＶに寄せる。Ｖは、彼女に握手を交わした。
「よろしく。コード２１１７だ。ここでは〝Ｖ〟と呼ばれている」
「あなたが、〝Ｖ〟だったのね。会えて光栄だわ」
「俺を知っているの？」
「ええ、もちろん。新米の間では有名よ」
Ｖは、メアリーを除いてまだ顔を合わせたことすらない新米の同志に自身が有名であることに疑問を抱いた。彼は、この海上要塞の中で一際目立つような行為をした、あるいはそのような人柄であるはずがないと承知していた。
「俺が、有名？」

「そうよ。2年前の自律人形大学襲撃事件の生存者で、唯一、司令官に救われた男、としてね」
「あぁ、なるほど…。確かに、俺はG司令に救われた。だけど、どうして本来、戦争とは無縁の俺が、司令なんかに救われたのだろうって今も思っている。俺は、あの時あの場所で死んでいてもよかったんだ」
メアリーは、ふと、空を見上げる。Vは、彼女の様子を見て先ほど吐いた弱々しい言動が彼女を呆れさせたと思い、謝った。
「あぁ、すまない。今の話はなかったことにしてほしい。実は、兵士じゃなくて本当は芸術家になりたかったんだ。でも、今は、もう何も思わない」
「あの時あの場所で死んでいてもよかった、って思うのはみんなそうよ」
メアリーが、俯きながら小声で呟いた。
「え？」
「いえ！何でもないわ」
その時、二人に試験結果の通知が届いた。互いは、各々の小型電子パネル装置を取り出して、結果を覗いた。メアリーは、目を大きく見開いて結果に驚愕し始めた。Vは、彼女の驚きの様子とは異なるものの、彼も自身の結果を喜んだ。
「やったわ！第二小隊に選ばれたわ！私！」
「良かったな」
「Vは？」
「俺は…」
メアリーが、Vの通知を覗いた。彼女は、彼の通知に対して異なる驚きを見せた。
「嘘…？あなたが…？」
「驚いたよ。こんな俺が、どうして」
Vの通知は予想外のものだった。彼は、第二小隊の選抜は落とされたものの、彼らの務める軍事会社の中、特定分野で圧倒的に優れた者しか選ばれることのない第一小隊への入隊通知が届けられていた。

「得点も尋常じゃないわ。凄いわね」
Ｖの成績は、格闘は低かったものの射撃そして筆記による得点は極めて高かった。その得点は彼でさえ驚くほどだった。
「命中率、構え、リロード…、それに作戦指揮まで！平均値を軽々と超えているわね」
「格闘は、メアリーよりも極めて低いけどね。学生時代と変わらないくらい努力はしたと思う」
こうした彼の行動と結果は、彼の愛人の死から世間への報復のためでもあるが、何事も完全を求める彼の異常な性格からもたらされたものでもあった。勉学に励む、そして絵を描く能力しかないと感じていたＶだったが、かつて無縁だった軍事でさえ、努力さえすれば身に付くことを知った。やがて、彼には僅かな自尊心が芽生えつつあった。
しかしながら、Ｖが考えるほど第一小隊の向かう先は甘くなかった。彼が第一小隊に入隊してから二回目の争いで、多くの仲間を失った。放射線に侵されていない地域であるＳ０２地区にＥＬＩＤの感染者が闖入した事件が発生した。第一小隊は、地区内のハザードを阻止するため、感染者に攻撃を仕掛けた。当初、感染者が地区に進入する勢いは収まりつつあった。だが、崩壊した地区のゲートを閉ざす作業が行われる瞬間、悲劇は起こった。突如、人間とはもはやかけ離れた三体の巨体感染者が、ゲートを破って進入した。感染者は、地区内の避難に遅れた住民や警備員を無残に殺していた。感染者は、罪のない複数の人間を片手で捕らえ、骨が複雑に折れて体内の血液の全てが体外の四方に飛び散るほど握りつぶし、壁へ投げ込んだ。死体の投げられた壁は、この上ない無垢で残酷な赤に染まった。Ｖを含む第一小隊は、感染者との戦いに苦戦した。彼らの持つ銃器では、感染者の行動を抑えることが出来なかった。小隊一同は、戦う中で感染者に多大な損傷を与える計画を考える中、次々と命を落としていった。数分後、小隊通信部が呼びかけたことにより、軍事会社支援のヘリが地区上空に現れ、ヘリ内からロケットランチャーが地上へ落とされた。さらに、感染者の行動を制限することのできる半径およそ６メートルのグリーンネットが、感染者三体の元へ落とされた。各地に散らばった

感染者は、落とされたグリーンネットに絡まり、その場に止まった。Ｖを含め残る４名の小隊メンバーは、ランチャーを手にしながら急いで地区内中心部を襲いかかった感染者の元へ向かった。やがて地区中心部のグリーンネットに覆われた感染者は、メンバーによるロケットランチャーから放たれた４発のロケットにより、木っ端微塵と化した。北部を襲いかかった二体目も同様の形で倒された。西部を襲った残る三体目の元にメンバーが向かった時、Ｖは、彼の目に焼きつくほどの二度目の惨劇を味わった。残る感染者は、覆いかぶさったグリーンネットを破り、小隊一同の元へ襲いかかってきた。メンバー４名がロケットランチャーを構える暇はなかったため、前方に配置された通信部２名が、感染者の両手に捕えられ、地上に何度も叩きつけられて殺された。その後、感染者は後方の隊長とＶを狙った。隊長は、自身のロケットランチャーを左に投げ込み、そしてＶを感染者から庇った。片手で引っ捕らえられた隊長は、唯一動かせることの出来た右手で左胸付近にあらかじめ取り付けていた手榴弾を取り、安全ピンを歯に加えて引き抜いた。隊長は、感染者の片手の中で自らの命を絶った。手榴弾の爆風によって生じた砂埃がＶの視界を妨げた。彼は、視界の悪い中、隊長の投げ込んだロケットランチャーを探した。砂埃が収まった後、隊長による手榴弾の攻撃により片腕を失った感染者は、残ったＶに目を付けて襲いかかった。しかしながら、Ｖの両手には既に二丁のロケットランチャーが構えられていた。２発のロケットが感染者に放たれた。その後、周りには感染者の肉片のみが散開していた。疲れ果てたＶは、二丁のランチャーをその場に捨てて、当てもなくゆっくりと地区のゲートまで向かった。彼の歩く周辺は、２年前の惨劇と全く変わらない真っ赤に染まった地獄絵図が広がっていた。ゲートが見えたところで、彼は両膝を地に付けてその場で留まった。やがて、上空ヘリが地区内に着陸した際、Ｖは支援部隊に救出された。支援部隊は、メアリーの所属する第二小隊だった。ヘリが着陸した瞬間、メアリーは真っ先にＶの元へ駆けつけた。メアリーは、声も出せず歩く力さえも失うほど二度目の絶望に陥ったＶを抱擁し、ヘリの元まで擁護した。感染者の脅威はなくなった後、Ｓ０２地

区の生存者と第二小隊は、ゲートの修復を行った。
この事件により、第一小隊はVを残して消滅した。残るVは、後にG司令の命令により第一小隊を、〝存在しない〟部隊として４０４小隊に部隊名を変更した。名前の由来は、ネットワークエラーによる表示である４０４　ｎｏｔ　ｆｏｕｎｄからもたらされた。しばらく、Vは自身が戦場に赴くことを拒み、施設の自室の中に閉じこもった。また、ある時には物資調達ヘリに搭乗し、Ｓ０７地区まで向かって彼の愛人の眠る墓地の元へ花を添えるいった行動を繰り返していた。

「俺の過去は、醜い争いから生じた結果によって汚された、なくなったんだ。今後も、俺はあらゆる敵と戦う中、過去という時間が自身からますます消失するのかもしれない」
「過去はあるわ。私があなたを抱擁した過去だってある。大丈夫、私がいる限り、あなたには過去が在り続ける」
メアリーは、Vの言う過去の概念が、仲間や親友、そして彼の愛人と共に築き上げ、自身が快いと感じた時間を過去として捉えているのだろうと察した。
彼らが、各々の経験を語り合う中一人の戦術人形が彼らの元へやって来た。
「V、いえ、指揮官。メンテナンスが終了しました。本日の作戦を実行しましょう」
「４１６か。具合は？」
「問題ありません。完璧です」
４１６が、ふと、メアリーの方に目を向ける。メアリーは、目を輝かせながら彼女を見つめていることにVは気づいた。
「紹介するよ。彼女は、戦術人形ＨＫ４１……」
Vが４１６を紹介する瞬間、メアリーは突然４１６に飛びつき、両手で４１６をぎゅっと抱いた。
「ひゃっ。急に何なんですか!?」
「可愛い!!何、この子!!」
４１６の美貌から理性を失ったメアリーは、４１６の頬を触った

り、彼女の胸をいやらしく触り始めた。
「本当に私たちそっくりね。人の皮膚と同様に柔らかい。胸も…、私よりも大きいし！」
「おい、メアリー…。一応、彼女だって人間…」
「指揮官！この人、誰ですか!?離してください！撃ちますよ！」
「メアリー！」
Ｖが、メアリーの名を叫ぶと同時に、彼女の動作がピタリと止まった。
「あ、ごめんなさい。戦術人形を見るのは初めてで、つい…」
「４１６、許してやってくれ」
「第二小隊所属隊長、メアリー・Ｋ・カサットです！以後、よろしく！」
メアリーは、４１６に敬礼しながら自己紹介する。すると、４１６も彼女に敬礼しながら自己紹介を行なった。
「４０４小隊所属、戦術人形ＨＫ４１６です。よろしくお願いします」
彼女たちは互いに握手を交わした。
「４１６、先に作戦室で待機しておいてくれ。準備したらすぐに向かう」
「了解しました、Ｖ。あ、いえ、指揮官」
「Ｖで構わないよ」
「分かりました。では、作戦室で待機しておきます、Ｖ」
４１６が作戦室へ向かった。Ｖは、椅子から立ち上がり、作戦準備に取り掛かろうとした。
「ねえ」
メアリーが、Ｖが休憩所から離れる前に彼の後ろ姿を見ながら話しかけた。
「Ｖ、こんなこと聞いて悪いかもしれないけれど、どうしてあの子、それにあの子も含めた戦術人形たちを、受け入れたの？」
メアリーが、彼にこのようなことを不安げに質問する理由には訳があった。かつて、彼は7年前の忌まわしい事件以来、酷く人形を憎ん

でいたためだった。さらに親友と愛人を失ったあげく、やがて自律人形が衰退しつつある人類に取って代わり世界の情勢を一変させてしまうのではないかといった恐怖も彼の身を少しずつ蝕んでいた。４年前から、彼の側から一度も離れようと考えることのなかったメアリーが、彼の内面をよく理解していた。

Ｖは、吸い終わった2本目の煙草を灰皿に捨てた後、彼女に僅かな笑みを見せて返答した。

「それは、彼女たちに心があったからかな」

Ｖメアリーにその一言を告げて、休憩所を離れた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　５

２０６１年１２月中旬。Ｖと４１６は、Ｇ司令の新たな依頼を受け、Ｓ０７地区東部スラム通りまで向かった。

「本当に、ここにいると思いますか」

「司令の言ったことだ。間違いはない」

依頼とは、このスラム通りで鉄血工造のニューモデル自律人形が、何者かに違法売買され、その自律人形を連中から強奪するといったものだった。

東部スラム通りは、Ｖがかつて通っていた大学とは程遠い場所にあった。教授からは、決して学生や子供が向かってはならないほど危険な地帯だといわれていた。その通りには、兵士を退役してただただ死を待ち望む者や反戦団体の連中、チンピラなどあらゆる反社会的な者共が集まっている。Ｖと４１６が歩く中、スラム通りの連中は鋭い目線で彼らを見つめていた。Ｖは、連中がコソコソと彼について話していることが耳に入った。

「…グリフィンの野郎か？」

「あぁ、おそらくな。奴の背後の女は人形に違いない」

スラム通りの中心部に辿り着くと、どの建築物よりも一際目立った高層ビルが建てられていた。ビル内では、人形の不法売買や麻薬の取引、売春などのやり取りが行われている。以前、Ｖは作戦任務でこの

ビルを何度か訪れたことがあった。軍の上層部の暗殺依頼や他民間軍事会社や人類解放軍の情報入手など様々な交渉をここで行なった。
Ｖが高層ビルを眺めていると、突然、４１６が頭の痛みを訴えた。
「うっ…！」
「どうした!?」
Ｖは、倒れそうになった４１６を支えた。
「誰かが、ツェナープロトコルで私に何かを訴えている！」
「ツェナープロトコル!?ありえない。常時、切っているはずだろ？」
「私にも原因が分かりません！すごく大きな周波数で何かを伝えています！」
「何を!?」
「分からないです！ノイズが大きくて正確に聞こえません」
ツェナープロトコルとは、９０ｗｉｓｈが開発した広域通信プロトコルのことである。ある領域内の人形の間で直接コミュニケーションネットワークを確立させ、情報を伝達することができる。Ｖが、戦術人形との通信を行う場合、デールによって開発された鉄血工造の戦術兵器イージスの頭部を模したマスクを装着する。また、マスクには戦術マップ構築システムも搭載しており、戦術人形とのマップ共有が行える。
「通信先は？」
４１６が高層ビルの上部を指差す。
「あの辺から…」
「分かった。行くぞ」
「了解です」
Ｖは、ショルダーバックからマスクを取り出し、ゆっくりと頭部に装着した。そして、中から上着の後ろに隠し持った拳銃のマガジンも取り出した後、バックを路上へ放り捨てた。彼が、右目を二回瞬きすると後方部から蒸気が放たれて眼光が黄色に眩く輝き、マスクが起動し始めた。
「ツェナー展開。４１６、聞こえるか」
「ええ、聞こえます」

彼らは、ビル内へと乗り込んだ。
エントランスを抜けると、ビルに設けられた様々な事務所社員が彼らの姿に驚き、怯え出した。中には、人類解放軍の連中も存在しており、彼らが震えながら両手を上げている姿も見えた。４１６は、睨みながら彼らにレッグホルスターから取り出した拳銃を構えている。
Ｖは、たまたまエントランスへ駆け込んだ社員を右手で捕らえ、両手で胸ぐらを掴んだ。
「ここに自律人形がいるだろう。教えろ」
社員が、Ｖに両手で抵抗する。
「命が惜しければ抵抗するな。答えろ」
「し、知るか！」
Ｖは、社員の首に掛けられたネームタグの左上の社名を覗いた。
「ほう、昨年、鉄血工造と兵器所持契約を交わしたＰＭＣじゃないか」
「それがどうしたっていうんだ？」
「運が良かったな」
Ｖは、社員を床へ抑え込んだ。
「求めている人形は鉄血のニューモデルだ。お前らがヤツらから買い取り、このビル内の何者かに売りつけただろ？答えろ」
「誰が言うものか…」
「もう一度聞く！人形と買い手はどこにいる！」
「はっはっは…、言わねぇよ…このイージス頭が」
Ｖは、社員の右脚に１発弾丸を撃ち込んだ。
「あぁぁっ!!」
「次は、左脚に撃つぞ。早く答えろ」
「クソ野郎!!本当に撃ちやがった！」
Ｖは、続けて社員の左脚に二発撃ち込んだ。
「あぁっ!!クソッ!!クソォッ!!二発も撃ちやがったな!!」
Ｖは、社員の頭部に銃口を構え始める。
「分かった!!教える!!教えるから拳銃を下げてくれ…」
「どこだ」

「１０階!!１０階だ!!」
「買い手は？」
「モリグチグミとか言った東洋の大手グループだ」
「部屋番号は!?」
「１０…０６…」
「１００６号室だな」
Ｖは、社員を振り払い、４１６を呼び込んで奥側のエレベーターへ向かった。
×　　×
エレベーター内では、既にＶと４１６は銃撃の態勢に備えていた。Ｖは、Ｇ司令との通信を行なっている。
「鉄血の新型を所持していたのは、やはりあの西欧のＰＭＣでした。金銭目的で奴らと協力関係を築き上げ、グリフィンや我々を破滅に追い込むつもりだったのでしょう」
「その推測は合っているだろう。金には目がない連中とはいえ、まさか人類の敵、鉄血工造と手を組むとはな。それで、新型の行方は？」
「現在、取り返そうと向かっているところです。モリグチ、グループ…確か、そのような名前でした」
「モリグチグミだな。Ｓ０７地区から０９地区に蔓延る日系犯罪組織だ。連中は、鉄血から買い取った新型をモリグチに倍の値段で売った、というわけだ」
「犯罪組織ですか。となると、対話形式での交渉では話になりませんね」
「あぁ、そうだな。発砲を許可する」
「了解しました」
エレベーターが１０階に到着する。扉が開くと同時に、彼らは１００６号室まで駆け出した。Ｖが攻撃の合図を出すと、４１６は腰のポケットから小型爆弾を取り出して扉の側面に取り付けた。数秒後、爆弾は爆発し、扉は跡形もなく崩れた。すると、Ｖが先頭を切って室内の組員を射殺していった。扉の側に佇んでいた組員は、Ｖの不意打ち

に驚く暇もなく頭部を撃たれて殺されていった。続けて、４１６が室内の中央部まで駆け抜け、慌てて拳銃を取り出した組員の片脚を撃ち、立てなくなった彼らの頭部を撃ち抜いた。
部屋の奥側にはもう一部屋があることを把握したＶは、彼らの現在いる部屋の周囲を休む間も無く確認した。
「家具の背後に気をつけろ」
「ええ」
４１６が、部屋の面積の六分の一を占める倒れたテーブルの背後にゆっくりと身を近づけた。その瞬間、テーブルの背後から残る組員がナイフを構え、４１６に襲いかかろうとした。しかしながら、組員がナイフを振りかざした時、４１６はナイフをかわし、組員の片脚を崩し、腕を両手で取り押さえて床へ叩き落とした。そして、彼女は拳銃を構えて体勢を崩した組員の頭部に目掛けて弾丸を放った。
「見事だ」
「たいした事ないですよ」
Ｖと４１６は、拳銃を構えて奥の部屋へと進んだ。見るからに高価で年季の入った木製の扉を蹴り倒すと、モリグチグミのボスが両手を上げて、木製の机の後ろに座っていた。彼の様子は、焦燥感を醸し出していた。
「…何者だ？何が目的だ？」
Ｖが、冷静な態度で回答する。
「司令の命令で人形を頂きに来た」
ボスが動揺し始める。
「人形だと？はっはっは、そんなものはここにはない」
４１６が、ボスを睨んで返答する。
「嘘をついても無駄よ。ここから私に通信が入ったのは間違いないわ」
「さあ、渡してもらおう」
「クソッタレめ…」
ボスが、冷や汗をかきながら、部屋の側面に付けられたクローゼットを開ける。クローゼットの中には、金属で出来た巨大な隠し扉が設

けられていた。ボスは、隠し扉に取り付けられている数式ロック装置にパスワードを打ち込み、鍵がアンロックされた。隠し扉の奥へ進むと、狭く薄暗い空間が設けられていた。そこには、足枷を取り付けられて悲しい表情を浮かべた一人の娘が壁の側面に背中を付けて座っていた。彼女の右目には、痛々しい傷が縦に付けられていた。

「彼女よ!!」

４１６が大声で叫び、娘の元まで向かった。続けて、Ｖが彼女の元へ向かおうとした瞬間、ボスが右袖に隠し持っていたナイフを彼の右肩に差し込んだ。

「うぐっ!!!!」

体勢を崩したＶの腹部に目掛けて、ボスは右足で蹴りかかった。Ｖは、空間の端に倒れ込んだ。ボスは、Ｖの落とした拳銃を４１６に構えた。４１６は、すかさず拳銃をボスに構え、引き金を引いたが弾丸が放たれる事はなかった。

「弾切れ!?こんな時に！」

「はっはっは、運は俺に回ったようだな。ここまでだ」

４１６は、ポケットの予備マガジンを抜こうとした。すると、ボスは４１６の顔に一発の弾丸を放った。弾丸は、幸運にも彼女の頬にかすり傷を付けただけだった。

「やめておけ。次で、確実に当てるぞ」

ボスが、銃を構えながらゆっくりと４１６と娘の元に向かってくる。Ｖは、右肩のナイフを引き抜き、ゆっくりと立ち上がる。ボスは、４１６の頭部に銃口を突きつける。娘は、４１６の背後で怯えながら目を瞑っている。

「くぅ…」

「どこの誰だか知らねぇが、あばよ。お前を殺したら、次はアイツだ」

「おい!!」

Ｖがボスに叫ぶ。

「何っ？」

ボスがＶに拳銃を構え直す前に、Ｖはナイフをボスに目掛けて投げ

込んだ。すると、ナイフの刃先はボスの頭部に見事突き刺さった。４１６は、立往生するボスの胴体を蹴り飛ばした。ボスは、白眼を向け、口を開いたまま無残に死んでいった。

４１６は、予備のマガジンを拳銃に装填し、足枷を壊して娘を解放した。Ｖは、右肩の深く差し込まれた傷口に、予め用意していた消毒液の入った瓶を内ポケットから取り出し、ズボンの左ポケットからタオルを取り出した。そして、消毒液をタオルに浸し、傷口にゆっくりと当てた。

「不覚…」

娘が、Ｖを哀れみの表情を浮かべて見つめる。

「大丈夫だ。君は気にしなくていい」

「あの、助けてくれてありがとうございました」

Ｖが、４１６に再度彼女が人形であることを訪ねた。

「４１６、彼女が今回の目標である人形なんだな？」

「ええ、彼女で間違いないです」

４１６が娘の首の背後に刻印された登録番号を確かめる。

「鉄血の登録番号です。これを見るからに彼女はＵＭＰ４５の分子モデルに該当します」

「了解」

Ｖが、Ｇ司令に連絡を入れる。

「目標を手に入れました」

「ご苦労。基地に連れてきてくれ。すぐにデールの元へ運ばせる」

「了解」

「今回の報酬はそれぞれ通常の二倍で払おう」

「感謝いたします」

「ヘリを向かわせる。ビルの屋上で待機しておけ」

「了解しました」

Ｖが、連絡を切る。娘は、４１６に支えられながら前に進んだ。

「ここに長くはいられない。司令がヘリを向かわせたそうだ。屋上へ向かう」

「了解」

彼らが、１００６号室を抜けようとした時、娘が不安げな顔を浮かべてＶの左腕の袖を掴んだ。
「あの…」
「どうした？」
「私はこれからどこへ向かうのでしょうか？」
「我々の基地へ連れていく。心配するな、君に危害は加えない」
「あの、私は一体誰なんでしょうか。私自身が何なのかよく分からなくて」
「基地に来れば分かる。一つ言えるなら、君は特別な存在だ」
Ｖの言葉から娘が、やがて穏やかな容姿に変わっていった。
「特別な存在？」
「あぁ。君は、ただの民間型なんかじゃない」
「戦術人形だ」
娘が大きく目を見開いてＶの姿を見つめた。詳細は分からなかったが、Ｖの威厳ある言動から彼女は自身がただの人形ではないことを理解し、今まで手に入れることのなかった大いなる希望を抱いた。
娘は屋上に辿り着いた時、その場で両腕を大きく上げたり、軽やかに手足を動かしたりして舞い上がった。彼女は、久しぶりに太陽光を浴びることや外の空気を味わうことに喜びを感じていた。Ｖは、彼女の行動から改めて全ての人形に心がないわけではないということを把握した。
ヘリが着陸して娘が先に搭乗した時に、４１６はＶに先ほど彼が娘に語ったことについて尋ねた。
「カッコ良かったですよ」
「えっ？」
「さっき、あの子に話した事です」
「あぁ、先ほどの話か。なんか、そう言われると恥ずかしいな」
「そうですか？」
「あぁ。でも、あれはある意味自分にも言い聞かせたことかもしれない」
「自身が特別な存在、ということですか」

「あぁ。時には惨めな気持ちに陥る自分自身に伝えていたのかもな」
４１６が、ふふっと笑う。
「あなたは、やっぱり不思議な人ですね」
「不思議、か…」
Ｖは、マスクを外して内ポケットから煙草とヤスリ式ライターを取り出し、煙草の先端部に火を付けて一服しながら、４１６に続けて応えた。
「いや、多分、これは自身の中の葛藤なのかもしれない」
×　　×
×
「ＵＭＰ９、ただいま就任！みんなこれからは家族だ！」
司令室。Ｇ司令を前にＶ、ＵＭＰ４５、ＨＫ４１６、そしてデールとＵＭＰ９が集まっている。デールの改造により、娘は戦術人形ＵＭＰ９として生まれ変わった。開発で精力を使い込み、疲れ果てたデールが彼女について話し始めた。
「はぁ…はぁ…、コイツは驚いたぜ…。まさか、本当に鉄血のモデルだったなんて」
Ｇ司令が返答する。
「言っただろう。本物だって」
続けて、Ｇ司令はＵＭＰ９に笑みを見せて語り始める。
「改めて、我が軍事会社へようこそ。君は、君自身がこれから扱っていく銃器の名称であるＵＭＰ９の名の下にここで働いてもらう」
「りょーかいです！」
「そして、君の隣にいる彼女が君の姉妹に当たる」
ＵＭＰ４５が、ＵＭＰ９に笑みを浮かべて握手を交わす。
「ＵＭＰ４５よ。よろしく、ナイン」
「よろしく。あの、４５（よんごー）姉って呼んでいい？」
「良いわよ」
「やったー！よろしく！４５姉！」
Ｇ司令が、先程とは異なって荘厳な態度でＶに話しかける。

「V、これでようやく君の小隊を再び編成することが出来たな。今までの君は、４１６をパートナーとして数々の任務を果たしてきたが、これからは戦術人形である彼女たちと手を組みながら戦場に向かえ」
「了解しました」
続けてG司令は、ＵＭＰ４５たちに話す。
「君たちは、これから彼の率いる小隊の一員として戦ってもらう」
「分かりました」
「了解しました」
「了解しました！」
Vは、小隊についてG司令に尋ねた。
「第一小隊の再来、ですね」
「いや、君たちは第一小隊ではない。４０４小隊、通称、〝存在しない〟部隊だ」
G司令は、Vの左肩を右手で押さえながら落ち着いた表情で話した。
「もう、君は第一小隊の呪いを背負わなくていい」
Vは、眉間をしかめて無言で俯いた。
「あぁ、それと、小隊にはもう一人加わるぞ」
V、４１６が驚く。
「それは、本当ですか？」
「あぁ、明日にはここに到着するだろう。上層部からの贈り物だ」
「司令、来るのは人形ですか？」
４１６が尋ねる。
「そうだ。君と同じアサルトライフルだそうだ。君たちの部隊で有効に使ってくれ」
「了解しました」
「なになに？家族が増えるの？やったー！」
「しかしながら…、上層部曰く、日頃の扱いには少々厄介な人形らしい。その件については、４１６、君が対処してくれ」
「わ、分かりました。世話を焼かせる子じゃなきゃいいけど」

G司令が、窓際に立つ。
「では、４０４小隊一同、今後の活躍に期待している」
G司令が、目を細めながら深刻な表情でVに話す。
「頼んだぞ、V」
「了解しました」
×　　×
×
その日の夜、Vは、眠れずにヘリポートに配置された休憩所の椅子に腰掛けながら、夜の海を眺めていた。
「よぉ、こんなところで何やってんだ？」
後方からデールがやって来る。
「君こそ、こんな夜にどうして。良い子は、ベッドの上で眠る時間だ」
「だから、子供扱いすんなって!!」
Vが、笑う。
「悪かったよ、冗談だ。君も眠れないのか？」
「あぁ、そうだよ。ちょっとな」
×　　×
×
デールは、Vにもらった缶コーヒーを飲みながら月明かりの反射する海を眺めている。
「あぁ、これ、ありがとな」
「いいさ。俺と君の仲だ。日頃のマスクや武器のメンテナンスのお礼だ」
デールは、コーヒーを飲み干す。Vは、蝶事件以来のＵＭＰ４５の容態について彼に尋ねた。
「ＵＭＰ４５の件なんだが…」
「おう、彼女がどうかしたか？」
「最近の彼女の調子はどうだ？ここ数日、俺は４１６と行動を共にしていたから、なかなか彼女と話す事がなかったからな」
「事件直後のメンタルと比べるなら、僅かだが回復しているな。で

も、アイツ、どうしてか事件データの削除を嫌がるんだよな。安全局の裏切りや仲間の殉職など嫌な記憶ばっかりなのに。そのデータさえ削除できたら、いつでもアイツを戦場に立たせることは出来るんだがな」
「いや、そのデータは彼女に残しておいてくれ」
「どうしてだよ？」
「彼女が大切にしている記憶があるからさ。それはＵＭＰ４０との時間。彼女の最初で最期の親友との時間が詰まっているんだ」
「そっか…、大切な時間か…」
「問題ない。彼女はきっと彼女なりに決着を付けるはずだ」
続けてＶは、ＵＭＰ９についてデールに訪ねた。
「９はどうだ？自律人形だった彼女が、戦術人形となったわけだが何か異常とかあったか？」
デールは、椅子の肘掛けに肘をついて頬杖をついて応えた。
「そうだな…、別に異常とまでは言えないが、４５と瓜二つだから後ろ姿だと見分けがつかない」
「そうか？髪や目の色、容姿、言動で分からないか？」
「いやいや、実はそうでもないんだ。それで、シーアがＵＭＰ９にリボンを付けてツインテールに変えたってくらいかな。特に何も変わりはないな」
「４５がポニーで、９がツインか。覚えておく」
「でもな…」
デールの顔が急に赤くなる。
「でも…？」
「なんだよ？」
Ｖが、デールに片耳を寄せた。
「ＵＭＰ４５の方が、胸が小さいんだ…」
Ｖが、ゆっくりと耳を離して咳払いをした。
「それ…、絶対、４５に言うなよ」
「お、おう。もちろん」
Ｖが、椅子から立ち上がり部屋へ戻ろうとする。

「さて、部屋へ戻るよ。作戦報告書作成の仕事も残ってるしな」
「あぁ、俺も。第三部隊の銃器のメンテナンスしなきゃなんねえし」
「じゃあな」
「あぁ、またな」
デールは、ポケットからバールを取り出し、くるくると回しながら技術室方面まで向かっていった。Ｖは、消えることのない月明かりに照らされた海を見ながら、大学時代に愛人や親友と通い続けたバーのフレンチディスコを思い出しつつ、軽いステップを踏んで部屋へ戻っていった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　６

４０４小隊が結成されてから４ヶ月が過ぎた。作戦室にて、ＶはＧ司令と次回の作戦について対談していた。Ｇ司令の伝えた内容は、これまでとは異なりＶの気分を一変させるほどのものだった。
「君が本当に復讐する時が来たようだ」
「まさか…」
「あぁ、そのまさかだ。君の人生を狂わせた７年前の事件の主犯が生きていた」
Ｖは、歯を食いしばり強く拳を握り始めた。
「その主犯は誰なんですか…？」
「我々は、ソイツを《指導者》と呼んでいる。指導者は、鉄血工造で生産された第一世代戦術人形のマスターモデルだった。当初、彼は我々同様戦地へ赴き様々な任務を遂行できた人形だったのだが、突如、人類に叛旗を翻した。彼は、その当時同じくして生産された第一世代モデルをコントロールして、君の大学を襲った。結果、グリフィンの部隊によって鎮圧されて事件は終息を迎えたと思われた。だが、ヤツは身を隠して７年間、次の戦争の準備を企てていたそうだ」
「同じ鉄血なら、どうしてエリザの支配下に置かれない？」
「推測だが、ヤツはリコリスのデータなど必要としていない。欲するのは、破壊と鎮静のみ、だろう」

Ｖに７年前と変わらない怒りと憎しみの感情が込み上げてきた。
「クソッ。あの事件はあれで収束したんじゃなかったのか！」
「既に指導者の行動が始まっている。時間がない。復讐を果たす時だ。三日後の作戦に備えろ」
「了解…」
×　　×
×
要塞施設内射撃場。ここでは、各部隊の兵士が日々射撃訓練を行なっている。作戦当日から二日前、Ｖは射撃テストを行なっていた。内容は、戦術人形の用いるメインウェポンを、彼女たちを率いる指揮官が用いて射撃を行うものである。特に、このテストは戦術人形を率いる前線指揮官向けとして知られている。Ｖには、よく分からないものだったが、シーア曰く戦術人形のスティグマ（烙印技術）に関係するものだと伝えられ、彼はしばしば受けていた。
「最後に、ＨＫ４１６のテストです。マガジンを装填して、発砲開始の合図を出してください。開始の頃合いは、ご自由にお願いします」
Ｖが、ＨＫ４１６を構えて前方に配置された人型の的を狙う。その隣で、シーアが、監督を務めている。
ＨＫ４１６、彼女のアサルトライフルはホロサイトが随分と前方に取り付けられていた。しかしながら、狙う分に問題はなかった。ホロサイトの位置は、兵士によって好みが異なると言われている。
Ｖは、ＨＫ４１６のマガジンを装填した。そして、グリップを強く握り、引き金に指をかけた。開始の合図として、彼はシーアに目を向けて頷いた。
「では、いきます」
シーアは、左手に持った電子ホイッスルを上に掲げて鳴らした。音がＶの耳に伝わった瞬間、彼は瞬時に的の頭部を狙った。一発、二発そして三発と続けて弾丸は頭部の中心に当たった。
Ｖがテストを行う中、彼の背後には壁にもたれてテストを見届ける４０４小隊一同が居た。彼女たちは、Ｖの命中率に驚愕していた。
「凄いわ。単発で１ミリもぶれることなく的確に頭部を当ててい

る」
「指揮官は、やっぱり凄いね」
ＵＭＰ４５とＵＭＰ９がコソコソと話している。その隣で、４１６がどうしてなのか赤面しながらテストを見ていた。
「な、なんか、他人に銃を触られていると…こう…身体がムズムズするわよね…」
「…感じちゃってるの？」
「ち、違うわよ!!」
ＵＭＰ９がニヤニヤしながら４１６をからかった。４１６は更に顔を赤くした。その頃、Ｇ１１はぐっすりと射撃場休憩室の椅子の上で寝ていた。休憩室を掃除する清掃係が、彼女の様子に困っていた。
×　　×　　×
「お疲れ様です。結果を確認します」
シーアが、右手の端末装置で結果を確認する。
「Ｓです！今回もおめでとうございます。現状維持といったところでしょうか。この次も頑張ってくださいね」
「…ありがとう。頑張るよ」
「結果は司令官に報告しておきますね。お疲れ様でした」
シーアが、射撃場を離れる。Ｖは、後方の机に置かれたタオルで汗を拭った。彼があらかじめ用意していた水筒を開けて水分を補給する中、ＵＭＰ４５たちがやって来る。
「お疲れ様！」
「…ありがとう」
「どうしたの？」
ＵＭＰ４５は、Ｖの通常とは異なる不安げな表情を見て心配に思われた。
「大丈夫？」
「あぁ…大丈夫。ちょっと疲れたかな。外の空気を吸ってくるよ」
Ｖは、小隊メンバーを置いて射撃場を離れた。
彼が屋上へ続く通路を歩く中、前方から第二小隊が移動式手術台を

囲みながら、急いで向かってきた。Ｖは、何事かと思い第二小隊の囲んだ手術台を覗いた。
「!!??」
Ｖの目に映ったものは、彼の心を間も無くして蝕まれるほど残酷なものだった。左腕を失った重傷姿のメアリーが台の上で悶えていた。腹部には、二発の銃弾による穴があり、胸部には鋭利な刀剣類で斬られたと思われる大きな傷がおよそ４０ｃｍ痛々しく刻まれていた。
「くぅ…、殺してやる!!殺してやる!!殺してやる!!」
メアリーが、叫びながら何かを掴み取ろうと右手を震わせながら掲げている。
「指揮官!落ち着いてください!!今のあなたでは命が危ないです!!」
第二小隊隊員がメアリーを抑え込んだ。やがて、麻酔マスクを取り付けられて、彼女の身動きが止まった。
隊員たちは、Ｖに敬礼を交わしてメアリーを救急室へと運んだ。
瀕死状態のメアリーの姿を見たＶは、これまでにないほどの怒りと憎しみ、そして若干の悲しみの感情が込み上がった。彼は、同様に救急室へと向かい、指揮官であるメアリーを見守る第二小隊隊員の一人に彼女を瀕死状態にさせた犯人を尋ねた。
「誰がやった…?」
「Ｖ指揮官!それは…」
Ｖは、隊員の胸ぐらを掴んだ。
「誰がやったと聞いているんだ!!誰だ!!」
「《指導者》です!!」
Ｖは、隊員を離す。
「私たちは、先ほど、Ｓ０７地区森林地帯にて鉄血勢力と戦っていました。勢力は一掃されたと思われた時、ヤツが現れて、指揮官は第一世代だと油断して彼の元へ向かいました。もちろん、私たちは彼女を止めようとしたんです!ですが、もう、遅かったんです。彼女は、ヤツに返り討ちにされました」
隊員が泣きながら、事情を話した。

「復讐してやる…。復讐してやる」
Ｖは、救急室の窓を拳で殴りかかった。窓は、一瞬にして粉々に割れた。彼は、メアリーを一瞥した後、作戦室へと駆けていった。

作戦当日。作戦内容は、その日の夜Ｓ０７地区で行われるＩ．Ｏ．Ｐ製造会社のパーティーに潜入し、研究員の身辺警護を秘密裏に担当することだった。《指導者》は、このパーティーを襲撃するだろうと思われた。４０４小隊は、パーティー会場へと乗り込んでいった。
会場内の建設は独特な作りとなっている。一階は、パーティーや宴会、あるいは舞踏会などを開くための空間が設けられている。そして、一階のフロントに位置する大階段を登ると、左右に分かれた小階段から二階の展望台に通じる。また、二階の両端に設置されたエレベーターを用いることにより、一階を見渡すことのできる見物スペースが設けられた三階へ向かうことが出来る。
正面入り口から、ＵＭＰ４５とＶが正装姿で研究員に成り済まして潜入した。一方で、ＵＭＰ９、Ｇ１１そして４１６はヘリから二階展望台へロープを下ろして潜入した。ＵＭＰ９は二階の各エリアを確認し、Ｇ１１と４１６はエレベーターに乗り込み、三階の各エリアを確認していった。
「何とか、騙せたわね」
ＵＭＰ４５が、偽装の社員証を中指と人差し指で掴んで見せている。
「そうだな」
彼らは、偽装の社員証を側のゴミ箱へ捨てた。
「さてと、《指導者》さんは一体どこからくるのかしらね」
「分からない。でも、油断はするなよ」
「ええ、もちろん」
Ｖは変わらず内ポケットに隠されたホルスターに数年間使い続けているＭ１９１１Ａ１を隠していた。また、ＵＭＰ４５は同様にワルサーＰＰＫを備えていた。
「それより、指揮官」

「…どうした？」
「今日のスーツ、私に似合ってるかしら？」
「４５、今はそんなことを話している場合じゃない」
「はいはい、分かりましたよ」
その時、突如、会場の上空から数十体もの鉄血工造の戦術人形が降り立った。Ｉ．Ｏ．Ｐの研究員は、鉄血勢力に恐れて一斉に出入り口の扉へと駆け込んだ。しかしながら、扉は外側から硬く閉ざされていた。
「敵だ!!」
Ｖは、マスクを装着してツェナープロトコルによる通信を行なった。
「全員聞こえるか!!!応答しろ」
ＵＭＰ４５が応答する。
「聞こえるわ。前方の敵を攻撃するわ」
Ｖの通信にＧ１１、４１６、そしてＵＭＰ９の返答がなかった。
「どうした？９!?、Ｇ１１!?、４１６!?応答しろ！」
「キャァァァァ!!!」
突如、４１６の叫び声が通信によって届いた。
「どうした!?!?４１６!?４１６!!!」
「ダメだ。応答がない…！」
「指揮官、ここは一先ず研究員の救助を！」
ＵＭＰ４５の通信がＶに届く。Ｖは、ＵＭＰ４５の言葉に従って彼女の元へ駆け込んだ。
警備員が、扉付近に佇んでいる研究員の前で鉄血の戦術人形と応戦している。しかしながら、人形の圧倒的な数と力に対し、次々と命を落としていった。ＶとＵＭＰ４５は、左右に分かれて会場内の大理石の柱の背後から、警備員や研究員に襲いかかる戦術人形の頭部を狙い、撃ち殺していった。
「予備のマガジン合わせ、残り２５発。正面出入り口の扉は脱出不可能。ダメだ、何か策はないのか？」
「攻撃やめ!!!!!!」

その時、中年の男性のような声が会場内を響かせた。その瞬間、鉄血の戦術人形は、各自所持する武器を下ろした。
すると、正体不明の鉄血製人形が上空から飛び降りてきた。その重量感のある身体は、会場の大理石でできた床の半径7メートルを粉々に粉砕した。全長およそ2．5メートルの巨体で、全身がフルブラックにカラーリングされた鋼鉄に覆われ、両眼は赤く輝き、こちらを鋭く睨んでいる第一世代戦術人形が彼らの前に立ちはだかった。
「ごきげんよう。I．O．P製造会社研究員諸君。そして、見知らぬ傭兵と戦術人形さん」
その巨体は、上品にお辞儀を行なった。
「我が名は、ヴィンセント。どうぞ、よろしく」
研究員達がざわついている。
「お前が《指導者》か!!」
Vが、ヴィンセントに銃口を向けながら叫んだ。ヴィンセントは、Vを睨んだままでいる。
「《指導者》…、美しい響きだ」
「回答になっていない。質問に答えろ。お前が《指導者》か?!」
「まぁ、後でゆっくり話をしようではないか。まずは、君の背後に佇んでいる畜生以下の者共の抹殺が先だ」
研究員が、ヴィンセントの言葉に恐怖を抱いてその場から逃げようと扉を何度も叩いたり、その場にうずくまって嘆いている。
「悪いが、俺の任務は彼らの護衛に当たることなんでね。それは無理だ」
Vは、すでに支援部隊による援助の連絡を会社側に通達していた。ヴィンセントは、溜息のような仕草を行いVの顔を見て話しかけた。
「…いいか、傭兵くん。君が戦う理由は何だね?あるいは戦う相手は一体誰だ?」
「俺は、この不安と混沌に満ちた世界へ復讐するために戦いを望んだ。お前は、まさに今、世界を不安と混沌にさせつつある俺の戦うべき相手だ」
「飛んだロマンチストだな、君は。いいか、よく考えてみろ。君は根

本的に間違っている。不安と混沌の世の中にさせたのはお前達、人類ではないか。今、君の背後の奴らこそ、不安と混沌を作り続ける愚か者どもだと思わないかね？君が復讐するべき相手は奴らだ。奴らこそ、私のような機械仕掛けや破滅の世界を創造した張本人じゃあないか」

Ｖの拳銃を握る手は震えていた。彼は、ヴィンセントの言葉に困惑していた。そもそも、この世界を作り出したのは我々自身であること、さらに人形を生み出したことも我々、人類であることに改めて把握した。彼は、もはや誰が敵なのかよく分からない状況に陥りつつあった。

「君は、一体、何に復讐しているんだ？君の思う復讐とは何だ？」

「アイツの言葉に惑わされないで!!今は任務優先よ!!指揮官!!」

同様に銃口をヴィンセントに構えるＵＭＰ４５の通信によって、Ｖは我に返った。

「私がアイツを撃つ!!立ったまま死ね!!」

ＵＭＰ４５が、前方に佇むヴィンセントの前まで駆け抜けながら弾丸を放った。しかしながら、鋼鉄に覆われたヴィンセントの身体は、弾丸を受け付けなかった。彼の前に辿り着いたＵＭＰ４５は、右足で彼の頭部を蹴り上げ、そして、左手で拳を握り込み、彼の胸部を殴りかかった。だが、やはり、彼は一切びくともしなかった。次の瞬間、ＵＭＰ４５の左腕をヴィンセントは右手で捕らえて、彼女の身動きを封じた。

「くそっ！離せ!!」

ヴィンセントは、必死で抵抗するＵＭＰ４５の腹部を左手で殴る。

「うぐっ!!」

ＵＭＰ４５は、その場で気を失った。ヴィンセントは、彼女の左腕を離さずにいた。

「４５!!畜生!!彼女を離せ!!」

その時、支援部隊がヘリで会場上空に辿り着いた。すると、ヴィンセントは不敵な笑いを彼らに聴かせた。

「なにがおかしい!?」

「無駄だ」
支援部隊のヘリが、ヴィンセント率いる勢力が予め用意していた爆撃機によるミサイルに直撃し、Ｓ０７地区の湾岸部へと散っていった。
「嘘だ…」
「こうなることはすでに予測済みだ。傭兵くん」
「くそぉ!!!!!」
Ｖは、ヴィンセントの前に向かいながら彼の頭部を目掛けて何発も撃ち続けた。しかしながら、やはりびくともしなかった。すると、ヴィンセントは、左手に装填された機関銃を用いてＶの右腕部と両脚、そして頭部に弾丸を放った。弾丸は、全て彼に命中した。マスクは、ヴィンセントの放った弾丸によって遠方へ飛ばされた。Ｖは、右腕部と両脚の痛みに耐えられずその場で膝を下ろした。
「くぅ…ヴィンセント…」
銃弾による鋭い痛みが、彼をじわじわと襲いかかった。
「愚かなＩ．Ｏ．Ｐ諸君。お前達は、我々に与えてはならないものを導入した。それは何だか分かるかな？」
研究員がますます怯え始め、扉を激しく叩いたり、床に伏せる者も出始めた。ヴィンセントの演説は止むことなく続けられた。
「感覚だよ。人間の持つ感覚そのものを我々に与えた。特に、痛覚を知っているだろう。第二世代モデルならば、既に備えられている。あぁ、一体、どうしてお前達はお前達特有の感覚を我々に備えた？我々がお前達のようになるとでも思ったのか？それは大間違いだ」
ヴィンセントは、ＵＭＰ４５の左腕を無理やり掲げる。
「お前達の罪深き研究成果だ!!!目に焼き付けるがいい!!!」
「彼女に何をする??!!やめろぉ!!!!やめてくれ!!!!」
Ｖは、全身の精力を振り絞りヴィンセントからＵＭＰ４５を取り返そうと彼の前に立ち向かおうとしたが、既に遅かった。
ヴィンセントは、左手でＵＭＰ４５の左肩を強引に抑え込んで、右手に掴んでいる彼女の左腕を上に引きちぎった。
「アァァァァァァ!!!!!!!!!!!!!!」

ＵＭＰ４５の左腕部から人工的に作られた血が大量に噴出する。彼女は、激しい痛みのあまり、その場に倒れ込んだ。
「４５!!!!」
Ｖは、ＵＭＰ４５の前へ届くはずのない手を伸ばした。
「君たちの死はまだ早い。今日の目的は、Ｉ．Ｏ．Ｐ諸君の死だからな」
ヴィンセントは、ＵＭＰ４５の引きちぎった左腕を投げ捨て、研究員の前へとゆっくり歩いた。Ｖは、最後の力の振り絞り、彼の左脚を掴んだ。
「…やめろ」
「どうした？死にたいのか？」
ヴィンセントは、Ｖの手を振り払い、研究員の元へ進んだ。
「いいか。今日、お前達Ｉ．Ｏ．Ｐは最も世界へ貢献できたことに感謝するんだな。お前達の日々の成果は貢献に繋がることはないのだ。諸君らの死が、世界への最も妥当な貢献である」
死を恐れた研究員が会場内に散らばり始める。
「我がしもべ達よ。攻撃始め！」
研究員は、無残にヴィンセントの率いる人形の手によって殺されていった。数秒も経たないうちに、会場内が真っ赤に染まった。
「なんてことを…」
ヴィンセントが、Ｖの元へやって来る。そして、彼の髪を掴み取り、顔を自身の顔へ向かせた。赤く眩い眼光が、Ｖの視界にぼんやりと写り込んだ。
「傭兵くん、これが不安と混沌に満ちた世界を再構築する唯一の方法なのだよ。分かったかい？人は、暴力を平和的解決へと導かせることを私に教えてくれた。暴力なき平和は平和ではないのだ。世界は暴力を求めている。それとも、平和という言葉は虚偽なのかい？」
ヴィンセントが、Ｖの髪を離した。彼は、彼のしもべを連れて去ろうとした時、ふと思い出した一件をＶに話しかけた。
「おっと、言い忘れていたな。私が、《指導者》だ。改めて、以後、よろしくだな、傭兵くん。次に私の行動に邪魔をするのなら、君も殺す

こととなるぞ。さらばだ」
ヴィンセントは、その場から姿を消していった。Ｖは、間も無くしてその場で意識を失った。

中編　―　完